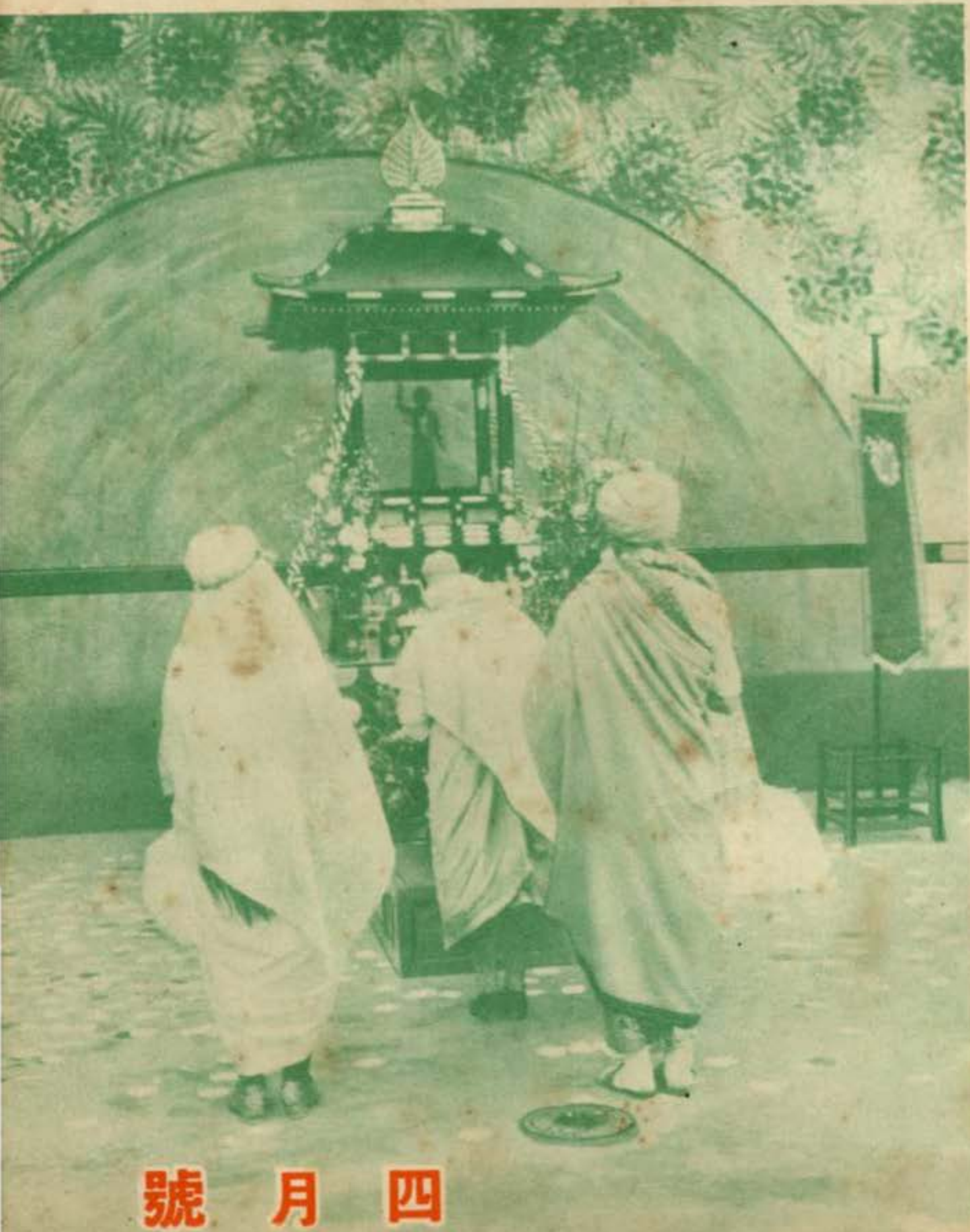


淨土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十二年三月廿日印刷本 昭和十二年四月一日發行

第三卷 第四號



號 月 四

中里介山著

法然上人傳

三六版二五〇頁
九ボラルビ付
美麗クロース装
定價 六十四錢
送料共

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から

法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を惱ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると信じて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園二十五號地
振替東京八二一八七

◇ 隣人の友社 ◇ 發行所

國寶

右京權大夫隆信筆

原本知恩院所藏

法然上人御影

堅壹尺四寸・横八寸
絹本寫眞
精巧典雅
數十度刷

申込み殺到!! 殘部僅少

本會は創立以來、夙に法然上人の御眞影頒布の急務なることを痛感し、京都知恩院所藏にして畏くも後白河法皇の勅旨により、藤原隆信朝臣の筆になつた相好端嚴、筆致精巧を極めたる國寶「法然上人御影」の複製企劃を進めてゐたが、時恰も淨土宗青年會聯盟でも期せずしてこの議が起り、茲に一致協力してこれが作成に着手し、種々苦心の結果、完成を見るに至つたので、本會は早速全國の支部に配布したところ果然！一般會員よりの申込み殺到のため、更に偉大なる上人の御風采を普く同志とともに拜すべく、特にこれが實費頒布を斷行してゐるが、驚く程多數の申込に接し、既に殘部は幾何もない。

精巧無比!! 神々しき上人の御影は實に眞に迫るものがあり、常に上人の人格を景仰し、念佛生活を體顯味到せんとする同志は、此の際至急お求めの上、朝夕座右に掲げて恭敬せられんことを敢て奨む。

一葉實費 金 壹 圓

(送料不用)

申込所

東京市芝區芝公園明照會館内

法然上人鑽仰會

振替東京八貳壹八七番
電話芝(43) 一三五二・〇八四〇



◇浄

土

第三卷
第四號

四月號 目次◇

・表紙

・花祭り

・扉・目次カット

・青柳喜兵衛

妙好人傳井上恒子

(三來夜話)

大島徹水

(二)

通俗方丈記

佐藤春夫

(一)

名作物語

李娃傳

西澤道寛

(一〇)

家庭の浄土

家庭の主婦として

岡本かの子

(一六)

二つの感想

岩野喜久代

(一八)

母になる人の養生

大橋りゆう子

(二〇)

俳句

早

春

賦

太田耳動子

(九)

聖典講義

貧苦を救ふ

大野法道

(六)

信仰相談

(三)



說苑

空

眞野正順 (一六)

趣味
傳説

地藏尊物語

葛飾山人 (一五)

愛

憎

(福田 勇畫)

野原完二郎 (一四)

小 説

マヤ夫人のお夢

(野水昌子畫)

大谷 隆雄 (一三)

童 話

七人の子供達
獸と遊ぶ上人

(一六)
(一四)

隨筆

寺に隣りて住む

新 居 格 (一五)

俳 壇

太田耳動子選 (一四)

歌 壇

與謝野晶子選 (一五)

笑 話

家庭重寶 (一四)

聖典
講義

信仰の深さの内容

中村辨康 (一六)

鎮仰運動ニュース

編輯 後 記

(一六)
(一六)

◇ 淨

土 第三卷
第四號

四月號 目次 ◇



未曾有の盛儀となつた

知恩院三上人遠忌

◇花にさきがけて三月六日か

ら七日間、京都總本山知恩院に於て行はれた三上人遠忌は、教界未曾有の盛況を呈し、津々浦々から参集した念佛信仰者は、京都全市から近郊を埋め盡し、文字通り淨土宗一色に色どつた。聖山を中心に、京一都の辻々、名勝舊跡は夜盡なき賑ひを呈した。

◇参集した數十萬の人々はこの盛大なる遠忌の集ひに、法燈益々燦然として全土に普き有様を目の當りに、見る心持して元祖上人を始め奉り、諸上人の御遺徳の廣大なるに、今更の如く感激を

新たにするものがあつた。

◇この盛儀に當り、畏れ多くも聖上陛下には御香華料を下し賜り、皇太后陛下には錦絲織打敷を下し賜ふた。これを仰ぐもの等しく皇恩のあまねく御深甚なるに感泣したのであつた。(御寫眞参照)

われらは、此御遠忌に際し粉骨碎身、事に當られた諸師の尊き勞力に深き感謝を捧げると共に、今後不撓の努力を以つて法然上人御遺徳の顯揚につとめ、皇恩の萬分の一に報ぜんの決意を新たにせざるを得ない。

淨土

今彌陀の本願に乗じて往生してんには、
願として成ぜずといふ事あるべからず、
本願にに乗ずることは、
たゞ信心のふかきによるべし。

法然上人法語抄 四八





三來 夜話 妙好人傳井上恒子

終始一貫した信仰の人

増上寺 法主 大島 徹 水

京都四條の繁華な商店街の真中に、これはまた、あたりのパツとした現代的の店々と打つて變つて舊式で宏壯な酒商が一軒、ほつねんとその存在を保つてゐます。

朝は早いかはりに、夜は通日も賑やかさを増して來る九時頃には店の大戸が下ろされてしまふ、さういつた昔ながらの老舗です。主人の名は井上治兵衛。

その名を聞けば、あゝあ知恩院華頂講の井上さんか、と我宗に關係ある古老の方々には頷いて戴けることと思ふ。治兵衛さんは同じ京都の坂根彌兵衛翁と共に、明治二十年頃の知恩院の財政的窮境を救ひあげた功勞者で、我宗にとつての恩人であります。剛毅果斷、熱火なやうな信仰に生き通して來た人です。若い頃福田行誠上人に歸依し、上人もまた彼を頼りにしてゐたといふ話はあまりに有名です。

従つて表は舊式な酒店ですが、この家の佛事の営まれる時など、ひとたび奥に通されますと、主人治兵衛さんの信心深さが部屋の中

氣にまで、反映されてゐるやうで思はず客の襟を正さずには置きません。

佛間の壯嚴なのはいふまでもない。見事な聖衆來迎の屏風がめぐらされてゐます。こゝで時々祖先祥月忌の別時法要が行はれます。さういふ場合には、幼い家の子供達まで一緒に經文を讀誦する習慣なのです。——子供達と云へば、よき家によき子生まるの言葉通り今では皆それぞれに出世して仕合せな月日を送つてゐますが——

治兵衛さんは養子でありました。いまお話ししようと思ふ治兵衛さんの奥さんの恒子さん

は、井上家の家附娘です。しかし似合ひの夫婦と云はうか、この奥さんがまたほんとに心がけのいい人で、世間によくあるやうな家附娘の我儘など微塵も持ち合せてありませんでした。若いときから夫によく仕へ飽くまで謙遜で、信心深かつたのです。

家にあつては子供の教育を唯一の愉しみとし、外出すると云へば坂根家の娘おべんさんと一緒に、歸依寺五、六に参詣する、内輪で黙々と家事にいそしむ性質でした。(このおべんさんと恒子さんは娘時代からの親友で、恒子さんは自分年下だつたので、おべんさんを姉として附合つてゐたのです)私の關係ある家政女學校の建築の際に、主人治兵衛さんに會計の事務を手傳つていたことがありますが、その時など奥さんはちつとも出しやばる風もなく、親切に蔭から主人を助けて仕事をすゝめて下さつた點、

今も思ひ出の種となつてゐます。……七年ほど前、主人の治兵衛さんが病氣にな

りました。それを動機に、夫婦は別に隠居所を設けて身を退きました。すると昨年になつ

るかもしれぬと思つて出来る限りの看病をしました。



奥さんとして六十六です。ところが、その奥さんの眞心こめた世話が神佛に通じてか治兵衛さんの病氣はうそのやうに癒つたのでした。と、年も詰つた十二月のはじめ、今度は奥さんがどつと病の床に倒れてしまつたのです。ひどい發熱でどんなにか苦し

いのでせうがよくなつたばかりの夫に心配をかけまいとちつと耐へてゐる——丁度、中娘のおたかきんの嫁ぎ先の家に祥月忌法要があり、いつもさうした時眞先きに来るはずの母親の姿の見えないのを氣にしたが、隠宅を訪れたおたかさんがこの様子に驚いて早速醫者を迎へたのでした。が、一通り診察を終へた醫者の口から、はかばかしい返事が得られません。

そこで彼女は直ちに姉妹のおかつさんを呼んで、いろいろ相談し合ひ、醫者を五人まで迎へて手を盡したのでしたが、奥さんの容體は刻一刻とわるくなる一方でした。けれ

て主人の病勢が改まつたのでした。何しろ老齡のこととて、奥さんはこれがお暇乞ひにな

ども、奥さんはそんな工合でありながら少しも取亂したところはなく、娘達に向つて、

「私はお父さんをお送りまをして後からまゐることと思つてゐましたが、老少不定でこれも致し方ありません。何事も因縁と思つてをります。たゞ後にのころお父さんを大切にして下さい、これがあなたの方のいちばんの母への孝養です。私はお念佛を唱へてゐますから何のおそれることもありませんね。」

さう語つて、奥さんはなほ細かいことにまゝで注意を興へ、自身の苦痛を更に訴へなかつたのでありました。一日經ち、二日經ち、十日になつて愈々いけなひとなつてから、奥さんは改めて主人治兵衛さんに、途切れながらもはつきり暇乞ひの挨拶をいたしました。そして、

「子供達はみんな大きくなりましたから心配はいりませぬ。私の死ぬまへに、一度、おべんさんにお會はせして下さいませ。」と舊友に會ひたい旨を頼みました。そして

高僧物語

獸物と遊ぶ上人

良寛和尚は雀と遊んだそうであるが

浄土宗の高僧眞察上人も

小兒、禽獸と戯れてゐる

のを無上の

幸福とし

てゐた

人であ

る。師

が幡隨

院に住

してお

つた時

寺に經



藏のないのを悲んで、衆に謀つて經藏を完成したその落

成の日に上人の頭に三羽の小鳥が止つて、畏れる氣味もなく戯れておつたと云ふ話がある。

鎌倉光明寺に住した頃には、裏山の狐などが澤山庭に集つて来て、上人もその獸共と子供の如く戯れておつた。

知恩院におられた時はまた子供達を大勢集めて、話をして聞かせたり遊びごとをし

ておつたとのことである。

參詣の人々は

「また布袋和尚が子供と遊んでおるぞ」と云つては、その上人の淨らかな小兒の

様な有様に微笑んださうである。

舊友が枕もとに來たのを知ると、

「あなたにもいろいろお世話になりました

あなたもどうか靜かに世を送つて下さい。」

微笑さへ泛べて、常のやうに語つたのでし

た。醫者のすゝめる注射一切を斷り、

「壽命です。」と云つて念佛申し、念佛の聲が

絶えるとともに立派な往生を遂げたのであり

ました。誠に近來稀な大往生でありました。

短歌

與謝野晶子選

一等東京井上海堂

遠山も有明月も白けれど馬はげま
して田を耕しぬ(評) 早春のしのめ時である。清烈な
梅花の香に通ふ所もある作だと私は思ふ

二等新潟 榎本茂一郎

妄想の絶ゆることなき身なれども
ひたすら道に生きんとぞ思ふ(評) 我々もまたこの作者に齊しき凡夫
であるから、まことに精進の一途は此外
に無しと共鳴されて頭が下る

三等山梨 伊藤久次

天つ日は麗かなれど妹は山べに
我れと夢ふめる春(評) 麗きをいたはりつゝ感傷的になら
ぬのが宜しい

北海道 花田 順往

足らざるを常と思へばことさらに
心なやますものなかりけり

和歌山 白枝遊路子

夕映の光に染める彼方なる山のう
ねりのしづかなるかな

秋田 清川 信

香を焚き經を誦せどもわが心あら
ぬ方へと誘はれて行く

長野 中山 弘

木魚の音一つ一つが凍ることひ
く御堂の寒き月の夜

名古屋 加納 光國

僧堂の灯の木の間より洩れくれば
夜の山路をわれ走せぞ入る

千葉 高橋美矢子

この寺のいと静かにて奥深く匂ふ
梅ありうぐひすの啼く

愛知 林 碩聞

臘梅の花散りにけりわが父が眠れ
る山に立ちて思へば

小倉 益田 慧光

幼しとわれをば今も見給へる母の
心に涙ぐまるる

香川 横江 史江

ほのぼの心明るしみあかりを上げ
てつげまし熱下りぬと

福島 朝日 蝶子

白雪の降り積むゆふべ母上はその
ごと清く終り給ひし

滋賀 豊田 綿子

父逝きて住む人のなきふるさとの
閉ざせる軒に木木の芽を噴く

山口 長岡 見地

早世の兒は賢しと人々のいへど心
の慰むべしや

徳島 神原 梅

われ常にみ佛たのむ聲により心に
絶えず光ふり降る

滋賀 本間 秀道

その昔藤の花房愛でながら道説き
まし、聖の庵

滋賀 福島 文子

老ませる母に仕へて今日一日寂し
きなかの幸ひを得つ

静岡 一向 山人

雪の鎧搦きつつ立てば耕せる男
ふりむき我れにうなづく

福岡 上野 久守

ちりの世を雪の埋めて清らかに鎧

の音わたる里の家々

仙臺 三浦 頼子

わが病ひ日に癒え行けど癒えがた
き思ひ深まる人思ふゆゑ

大阪 小山 文二

冬の日のけふ暖かし白梅の匂へる
庭に風も風ぎつつ

京都 松尾 慈海

朝もやに春の山門浮びつつ近き銀
杏に知らぬ鳥啼く

福島 齊藤 華舟

買ひ興へ得ぬと知りつつ店頭の子
供洋服手に取るもわれ

秋田 關 百合子

折々は歌をしるしてひそやかに毛
糸編むなり獨り居の家

北海道 寺田 禎山

濃萩のまけばね千代の聲高くうた
ひ合はせぬ磯の松原

奈良 良 瀧村 雲巖

遠近の薬家の灯かげほの見えてお
ぼろにかすむ春の夜の月

奈良 良 桐山 忠光

八方の塞がる運と卦の立てど進め
ば進、道はありけり



貧苦を救ふ

「四誓偈」講義——「その三」

大野法道

(二) われ無量劫において

大施主となつて

普く諸の貧苦を濟はずんば

誓つて正覺を成ぜじ

七、貧苦といふにも種々ある

之は四誓の中の第二誓で、衆生の貧苦を救はずにはおかぬといふ誓約である。

貧苦といふても、可愛い子供に餓食させねばならぬやうなのは、最もひどいのであるが、それ程でなくとも、どうしても要る物が買へないために、また支拂ひの期日が迫つても、やりくり算段がつかないために、お金の工面に頭を悩ますほどつらい

ことはない。

凡そ此世で、金に困るくらゐ苦しいことはないのであるが、貧乏といふても程度問題で「働けど／＼我が家の暮し追いつかず」といふ、その「追いつかず」も段々であり、どうにか暮しはしてゐるが、一寸のゆとりも無く窮屈なのがある。

これらは金の足らぬことから来る、人間苦の痛切なものであるが、金ができて苦はやはり附いてくる。それも大金となる程苦は大きくなる。足らぬ時には「もう少しでいゝから有つて欲しい」で済んだものが、相當の金を持つやうになれば、愛著の念が伴つて、もつと／＼増したくなるばかりでなく、一方に、それを無くしまひとする心配の苦まで、餘分なものが附くやうになる。

大した金もないくせに、柄にもなく見榮を張つて、身分不相

應^{オウ}な贅^{ゼイ}澤^{タク}な生活^{セイカツ}を爲^{ナシ}し、立^{リツ}派^ハな服装^{フクサウ}をしたり、宏^{オウ}壯^{タク}な住宅^{テウタク}に立^タち籠^{コモ}つたりしてゐて、その實^{ジツ}、うち裏^{ウラ}は火^ヒの車^{クルマ}である人^{ヒト}たちの苦^クしみは、どんなものであらう。その苦^クしさは、たゞの貧^{ビン}乏^{ハツ}のそ^ソれよりも何^{ナン}百^{ヒャク}倍^{バイ}の深^{シン}刻^{コク}なものがあるにちがひない。なぜなら、それらの人^{ヒト}は、わが心^{シン}の貧^{ビン}乏^{ハツ}から、自分^{ジブン}で掘^ホつた穴^{アナ}へ落^おち込^こんで、身^ミうごきもできないまでに苦^クしまねばならぬからである。

心^{シン}の貧^{ビン}乏^{ハツ}といふことになれば、同^{ドウ}類^{ルイ}はいくらもある。

自分^{ジブン}の實^{ジツ}力^{リキ}已^イ上^{ジョウ}に誇^{ホウ}大^{ダイ}して、うまく世^セ間^{カン}を渡^{ワタ}らうとする、さ^さむしい自^ジ尊^{ソン}心^{シン}。他人^{タニ}の榮^{エイ}譽^ヨにけちつけてそれを謗^{ソウ}る嫉^{シツ}妬^ダ。陰^{イン}へ廻^{マワ}つて他人^{タニ}の邪^{ジャ}魔^マをするなど、いづれも心^{シン}の貧^{ビン}乏^{ハツ}であるから、内^{ナイ}心^{シン}では良^ヨい心^{シン}持^チちはせず、後^コろ暗^カい世^セ界^{カイ}にさまよふ苦^クしみに取^トりつかれてゐる。

八、貧^{ビン}苦^クの救^{クウ}はれやうにも種^{イロ}々^々ある

薄^{ウス}い着^キ物^{モノ}で寒^{サムイ}空^{ソウ}にふるへてゐる人^{ヒト}に、温^{アタタ}い着^キ物^{モノ}を與^{あた}へたり、お正^{マサ}月^{ツキ}が來^きても難^{ナン}煮^シ餅^{ホウ}を祝^{イハヒ}ふことのできない人^{ヒト}に、お餅^{ホウ}を配^{はい}給^{たま}したりするのは、外^{ソト}から物^{モノ}を以^{もつ}て救^くふのであるが、あの『墮^ダ生^{セイ}の宿^{ヤク}』の歌^{ウタ}にもあるやうに、貧^{ビン}乏^{ハツ}してゐても家^カ庭^{テイ}はむつまじく、夜^ヨともなれば、窓^{マダ}から月^{ツキ}も眺^{なが}められると思^{おも}へば、はや貧^{ビン}苦^クから救^くはれてゐるのである。

佛^{ブツ}は人^{ヒト}に、「足^たることを知^しるがよ

足^たらぬ／＼で歎^{なげ}いてばかり居^ゐても、金^{かね}は天^{てん}から降^ふるものではない。心^{シン}の持^もち方^{カタ}を一^い變^へして、今^{いま}ある物^{モノ}を喜^{よろこ}んで、大^{たい}切^{せつ}に受^うけ用^{もち}ひる所^{ところ}にも貧^{ビン}苦^クの救^くひがある。

足^たることを知^しる反^{はん}對^{たい}に、不^ふ足^{そく}たら／＼、不^ふ平^{へい}不^ふ滿^{まん}で働^{はたら}いてゐる人^{ヒト}があるが、之^{これ}ほど損^{そん}な苦^くしみは無^ない。心^{シン}の持^もち方^{カタ}を一^い變^へして、今^{いま}自分^{ジブン}が置^おかれてゐる場^ば面^{めん}を喜^{よろこ}び、丈^さ夫^ぶで働^{はたら}ける何^{なん}より^{より}の寶^{たから}を樂^{たの}しんでゆく所^{ところ}に、ゆたかな人^{ひと}生^{せい}が成^{なり}立^たつのである。

足^たることを知^しるのも結^{むす}構^{こう}だが、たゞそれだけでは、人^{ひと}間^{かん}が小^こさくなつてしまつて、伸^のびる力^{ちから}がでこないではないか、といふ人^{ひと}があるが、それは、足^たることを知^しるといふ言^{こと}葉^はを見^みて、頭^{かぶ}で考^{かんが}へてだけ居^ゐる人^{ひと}の言^いふことである。

實^{じつ}際^{さい}に物^{モノ}を大^{たい}切^{せつ}に受^うけ用^{もち}ひ、心^{シン}を籠^こめて働^{はたら}くところには實^{じつ}力^{りき}が張^はりつめてくる。張^はりつめた實^{じつ}力^{りき}こそ、本^{ほん}當^{たう}に伸^のびる力^{ちから}であらねばならぬ。

草^{くさ}木^きの芽^めは、寒^{かぜ}風^{ふう}に吹^ふかれながら、じつとして自分^{ジブン}を守^{まも}つてゐる。そこには實^{じつ}力^{りき}が蓄^{たくわ}へられてゐるから、時^{とき}が來^きれば勢^{いきり}よく伸^のび出^でるのである。實^{じつ}力^{りき}を考^{かんが}へずに、たゞ大^{だい}きくなる事^{こと}だけを望^{のぞ}み見^みてゐる人^{ひと}は、あの、蛙^{かえる}が腹^{はら}をふくらませる競^{きやう}争^{そう}をした時^{とき}に、負^まけぬ氣^きの一^{いっ}等^{とう}強^{きやう}い奴^{やつ}が、まっさきにパンクした話^{はなし}を樂^{たの}にするがよい。

九、人間への最も大きい施しもの

實のところ、人間は皆貧乏なのだ、と見抜かれたのが阿彌陀佛である。そして悠久の悲しみを抱いて立つて居らるゝのである。

持ちあはせてゐる物に於ても、心に於ても、すべて貧しい自分と聞かされて、それが本當に判つた人ほど有望なものはないであらう。そこには「すべては之からだ」といふ、ひき締つた心が萌え立つてゐるからである。ゆるむ心の振を捲いて、いつまでも前進に勇むことができるのは、まづたく貧乏の自覺から來るのである。

よく聞く話であるが、昔は貧乏であつた人が大した財産家になつてからも、貧乏時代に用つた物などを大切に保存して、つらかつた事を忘れないと云ふことがあるが、かくあつてこそ、本當に尊い人間の生きた姿があるのである。

ゆたかな暮らしをしてゐるのを恃みとして、憤みを飲み、横柄に振舞ふやうなのは、大概ゆく先きが知れてゐる。そうした家についてまでも、福の神が宿つてゐる筈はないから。

貧乏の自覺を失はないかぎり、その人には本當のゆたかな人生が恵まれてゐる。

貧乏の警告ほど、人間への施しの大きいものはない事が判れ

ば、阿彌陀佛こそ「大施主」であり、従つてこの第二誓のころは讀めるであらう。

但しこゝに「大施主」といふのは、救ひの本を云ふのである。この本から流れ出る——人間の心を衝いて現はれる、様々の慈愛のすがたは、とても數へ切れぬことを知らねばならない。

(三) われ佛道を成ずるに至らば

名聲十方に超えん

究竟じて聞こゆる所なくんば

誓つて正覺を成ぜじ

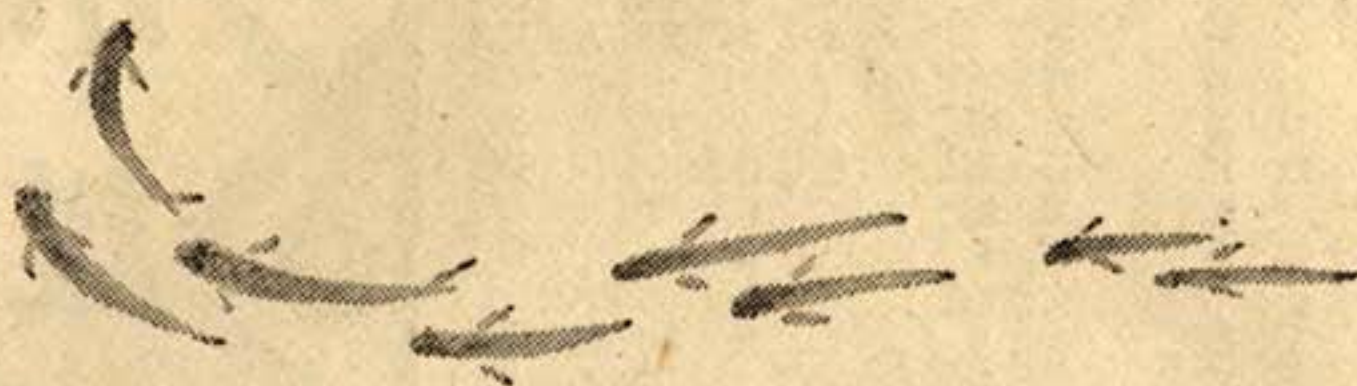
十、名に籠る慈愛のころ

之は四誓の中の第三誓で、阿彌陀佛の名が、どこまでも知れ渡らねば止まぬといふ誓約である。

此世に名が廣まるには、相當大きな仕事か、それとも變つた事でもしなければ廣まるものではない。初めから實名主義であるものもあるが、そんなのは、廣めらるべき實力が缺けてゐるのであるから、烟のやうに何時の間にか消え亡せてしまふ。

また、その名にした所で、浮名を流すのもあれば、惡名の流布するものもあるが、それらは人の噂も七十五日で、程なく忘れられてしまふ。

早
春
賦
生



早春賦

太田耳動子

外套のポケット 温く芝を焼く

芝焼いて 軟き火となりにけり

枯芝の節焼くる音ばちくと

野火の穂の吹きはなたれてふつと消ゆ

芝焼きの終りてそこらくもりぬし

凭りかゝる冬木櫻の撓みたる

しかし菅原道實、楠正成、豊臣秀吉、大石良雄、西郷隆盛、東郷元帥などの名は、それからそれへと傳へられて、盡きる時がないばかりでなく、その名の知れわたる所、おのづから人の心を引き立たせ、甘つたれてゐる弱虫を、正氣にもどす力を持つてゐる。

すべての人間の貧苦に全心を奪はれた心持を、名に籠められたのが阿彌陀佛である。故にこの第三誓の、わが名がどこまでも知れ渡らねば止まぬといふのは、つまり、人間の貧苦のある所、どこにでも付き添つてゐることを告げられたのであつて、法然上人は、此名に籠る慈愛の心に異常の感激を催はして、「たゞ佛名を稱へるだけでよい」と叫ばれたのであつた。まことに、阿彌陀佛の名による救ひは、人間の貧乏にふさはしいものであつて、人間の貧苦がこの世から無くならない限り、この名は、どこまでも何時までも、廣まつてゆくべき運命をもつてゐるのである。



唐の玄宗の天寶年間、常州の大官に蔡陽公といふ人があつた。大勢の家の子郎黨に擁れて名望一時に高かつた。五十歳の時に、その公子が二十歳になつた。至つて賢くて、文歳もなか／＼秀でゐたので、父は「我が家の千里の駒ちや」と云つて、その器量を誇つてゐた。衣服車馬を飾りたてゝ、豊富な旅費や學資を持たして、文官試験を受けに上京させた。

公子もその才に誇り、試験などは全然問題にしてゐなかつた。毘陵を出發して一月後、長安の都に着き、布政里に住所を定めた。

或日、東市に遊び、歸りに平康といふ花街の東門を入り、西南の友を尋ねようと思つて、鳴珂曲まで來ると、門庭はさう廣くもないが室宇のいかにも嚴整な一宅があつて、一扉は閉ぢてあつた。美しい娘が年若い侍婢に凭りかゝつて立つてゐた。公子はその姿の妙麗のに見とれて、覺えず久らく馬を停めて徘徊し、去るに忍びなかつた。詐つて鞭を地に落してその従者に拾はせたりなどして、しきりに娘を見た。娘の方でも同じやうに心を奪はれたが、竟に言葉を交さずに去つた。公子はそれ以來此の娘にすつかり心を

【はしがき】 支那の唐の時代の小説は、今日七十餘種傳つてゐるが、その中でも此の李娃傳は、特に有名なものである。作者は、詩人で有名な白樂天（皇紀一四三二——一五〇七）の弟の行簡である。李娃とは、娃は美女の意味で、李氏の美女である。元の戯曲の「曲江池」は、此の李娃傳を本として創作されたものである。今これを譯して紹介することにした。譯文は、或部分は直譯した箇所もあり、或部分は意譯した箇所もあり、又省略した箇所もある。要するに紙数を考慮し、且つ平易ならんことを努めた。麗妙なる原文に比較して、我筆の拙きを慙づるのみである。（西澤道實譯）

奪はれて、一時も忘れることがなかつた。密に人に訊でそれが花街の女で、李氏の宅であることを知つた。

他日、公子は奇麗な衣服を着て、大勢の従者を連れてその家を探ねると、直ぐに侍兒が出て來て戸をあけた。公子が「此處は誰の邸宅かと問ふと侍兒は返事もせず中へ走つて行つて、「いつぞや鞭をお落しに

なつた若君が見えました」と叫んだ。娘が大變喜んで、「お前一寸その方をお止め。妾は更衣をして出るから」といふ聲が聞えたので、公子は竊に喜んだ。引かれて垣根の處まで来ると、一人の白髮の老婆が樓へ上つて来るのが見えた。これが娘の母である。

公子は丁寧にお辭儀をして、「こちらに空屋があるそうですが、如何ですか」と聞くと老婆は、「誠にむさぐるしい處で、旦那方には向きませんが」と云つて公子を綺麗な應接室へ案内して、公子と對坐して、「うちに若い娘が御座います。何の技藝も出来ませんが、お客様の前へ出ることが好きですから、今お目にかけます」と云つて、娘を呼んだ。娘は、明眸皓腕、舉步鬢治、まことに絶世の美人であつた。公子はあまりの事に驚いて起つて仰ぎ見ることも出来なかつた。お辭儀をして時候の挨拶をした。娘は茶や酒の御給仕をした。しばらくして日が暮れて太鼓の音が四方から聞えて来た。老婆は公子の住處を聞いた。

公子は遠方だと云へば泊めて呉れると思つて、あさむいて「延平門の數里も先きの方だ」と

と答へると、老婆は、「もう太鼓も鳴りましたから、早くお歸り遊ばせ。門限を犯してはい



星入屋

けませんから」と云つた。公子は、「今日は非常に歡待を受けて、覺えず長坐をした。道は遠いし、城内親戚はなし、實に困つてしま

つた。どうしたらよからうか」と云へば、娘は、「むさぐるしくてもお宜しければこゝへお留り遊ばしても結構です」と云つた。公子は何度も老婆に目くばせすると、老婆は承知した。公子は、従者を呼んでその夜のお膳料として絹を差出したが、娘は何の待遇も出来ないからと云つて固く辭退して受けなかつた。直ぐに席を西堂に移した。帷帳、簾、榻、いづれも煥然として目を奪はんばかりの美しき。化粧道具の箱、衾、枕、皆整くめである。そこで燭を張つて御膳を先づ進めて、大變な御馳走をした。

御膳が片づけられて、老婆が起つて行つてから、公子と娘とは、談話に花を咲かせて、しきりに笑聲がした。公子が、「いつぞや偶然君の門前を通つたら、君は丁度牆の間にゐたが、それ以來心を奪はれて、一刻も忘れたことがない」といへば、娘も笑つて、「妾の心だつて同じで御座います」と云つた。公子が、「實は今日來たのは空屋をさがすだけの目的ではなくて、普段から思ひ焦してゐる願ひをかなへたいのだが」と話してゐると、そこへ老婆が来た。公子は、老婆の聞

かれるまゝにその辭を答へると、老婆は笑つて、「好き同志ならば、親でも致し方ありません。娘は至つてふつゝか者で、旦那のお相手は出来すまいが」と云つて承諾したので、公子は非常に喜んでありがたがつた。老婆は公子を婿扱ひにしてゆつくり飲んだ。

翌日、公子は荷物を李の宅へ運んですつかり引越してしまつた。爾來消息をくらまして、誰にも知らせなかつた。毎日役者や藝人を集めて遊び暮してゐるうちに、囊中拂底になつたので、遂に馬や召使まで賣り飛ばし、一年後には無一物になつてしまつた。老婆の待遇は次第に悪くなつたが、娘の愛情は段々に深くなつた。

或日、娘は公子に向つて、「貴郎と知り合つて以來、一年にもなりますが、いまだに嗣子が出来ません。竹林神へ參詣して御祈禱したいと思ひます」と云へば、公子は計略とは露知らず、非常に喜んで早速用意をして、娘と一緒に二晩泊つて祈禱をすまし、歸りに里の北門まで來た時に娘に勧められて娘の家の家へ寄ることにした。廣大な門構への家の前で、侍婢が車の後から、「こゝです」と云つて止めたので、公子が車から降りると丁度その時一人出て來て「誰方様でせうか」

と曰ふから「李の娘だ」と云ふと、その人は中へ入つて行つて知らせた。四十恰好の老婆が一人出て來て、「甥が來たか」と云ひながら公子を迎へ、車から降りた娘を迎へてゐてしばらくでせう」と云つて互に笑ひあつた。娘は老婆を公子に紹介した。それから皆一緒に戟門の中へ入つた。

戟門とは門前に矛戟のやうな儀仗を列ねた門のことで、これは官吏の館の表門によくあるものである。亭などもあり、竹木が茂つてゐた。公子が娘に、「此處は姨の私邸か」と聞いても、娘は笑つて他事にまぎらしてしまつた。直に茶や菓子が出た。しばらくすると駿馬に乗つた一人の使者がやつて來て、娘の母が急病で、人事不省であるから早速歸るやうにと知らせて來た。娘は姨に、「妾は一足先きに歸つて、それから馬を迎へによこしますから、主人と一緒に來て下さい」と云ふと、公子もそれについて行かうとしたが、姨はこれを止めて、「姉はもう駄目にきまつてゐますから、二人で葬儀の相談をしませう。ついて行つたつて仕方ありませんよ」と云つたので、止まつて葬儀及びその後の供養などの

經費の勘定をしてゐた。

日が暮れても馬が返つて來ないので、姨は、「返事のないのは奇怪ですね。貴郎先きに行つて様子を見て下さい。私もすぐ參りますから」と云つた。公子は遂に舊宅へ行つて見ると、門の錠が固くおろされてゐたので、變に思つて隣の人に聞くと、「李さんは、此の家をお借りになつてゐましたが、期限が來て家主に返し、二日ほど前に何處かへ引越してしまはれた」とのことで行つて聞い見ようと思つたが、已に日暮で、とても行かれないので、止むを得ず旅館で一夜を明したが、立腹の餘り一睡もしなかつた。

未明に起きて馬を馳せて行つて、何度も大聲で呼ぶと宦者が出て、來て聞いて見るとこは如何に、姨の家ではなくて崔尙書の宅で、「此處を昨日借りた人があつて、何でも遠來の中表を待つとか云つてゐたが、日暮前に行つてしまつた」とのことであつた。公子はすつかり途方にくれて發狂し、布政里の舊邸を訪ふことにした。

邸主は哀んで世話をして呉れた。公子は懇懃の餘り絶食三日に及び、すつかり重病になつた。十日後には、一層甚だしくなつたので邸主も平癒絶望と見て、葬具屋町の中に移した。町内の人達が氣の毒に思つて互に世話してゐるうちに、段々よくなつて杖をつい



て歩けるやうになつた。公子は葬具屋の手傳をして給金を貰つて自活してゐたが、數月後には大分丈夫になつた。公子は哀歌の稽古をしてゐるうちに非常に上手になつて、遂には誰も及ばぬやうになつた。哀歌とは、概

を牽く時に歌ふ歌である。長安には葬具屋の町が東西にあつて互に競争をしてゐた。東の町では車輿は綺麗であるが、哀歌は下手であつた。そこでその長は、公子の哀歌の絶妙なことを聞いて、二萬錢の金を出してこれを雇ひ込んで、竊に新しい歌をしどし習はせたが、誰もこれを知

らなかつた。

東西兩方の町の長の間に、天門街で優劣を争はうといふ話が出て、負けた者は罰金として五萬錢の酒肴料を出すことに契約が成立したその日は數萬の見物人があつた。西の町の人達は、車輿の類の劣つてゐるのには慙ぢてゐたが、哀歌は自慢で、長い裾の老人が數人に護衛されて、鈴を鳴らしながら進み出て来て、南隅に設けた高い壇に登つて「白馬の詞」といふのを歌つた。非常に威張つて左右を見廻し、傍若無人の態度であつた。しばらくして、東の町では、北隅の高い壇の上で公子に

「薤露の章」を歌はせた。きちんとした衣服で、態度は徐かで、その哀れな歌の響は林木を動かさんばかりであつた。見物人は覺えず歎息して涙を流した。西の町では見物人に誚られて恥ぢ、約束の金を置いて遁れて行つてしまつた。

此の時代には、入計時と云つて、地方官は毎年一回上京することになつてゐた。公子の父も適々在京中で、此の日、同列の人達と一緒に變装して見物に来てゐた。その老僕が公子を見て、若旦那様そつくりだと云つて泣然として泣くと、父は「あの子は盜賊に殺された筈だ。こゝへ来るものか」と云つて相手にしなかつた。老僕は馳せて行つて、群衆の間に匿れやうとする公子の袂をつかみ、相擁して泣き、車に載せて父の所へ連れて來ると、父は非常に責めて、「何てことをして呉れた。家の名譽を汚して。何に來たんだ」と云つて徒歩で曲江の西の方へ連れて行き、着物を脱がして鞭で數百遍も打つた。公子は苦みの爲めに斃れた。父はそのまゝ放り棄てゝ去つた。仲間の者が席にくるんで葬らうとしたが心臓の邊が少し温いから、連れて歸ると翌朝蘇生した。一月後になつても手足も舉らず鞭の痕はたゞれて汚くなつてゐたので、仲間もいやがつて或晩路傍へ棄てた。行人の投ず

る餘食を得て露命を續いだ。百日後には、杖で起ち、つぎだらけの着物を着て破甌を持つて町内を乞食して歩いた。

そのうちに寒い冬が来た。或大雪の朝寒飢に苦みながら、雪を犯して乞食に出たが、雪がひどいので何處の家でも外の戸を發いてゐない。安邑の東門から垣に沿うて北に曲つた七八軒目の家だけが、門の左の扉が啓いてゐた。こゝが娘の家である。公子はそんなことは知らなかつた。しきりに飢寒を訴へて呼び號ぶと、娘が聞きつけて、その聲を辨じて侍兒と歩を連れて出て来た。公子はそれを見て、憤の爲めに絶倒して口もきけなくなつた。娘が何か聞いても頸でうなづくだけであつた。娘はその頸を抱き、繡襦でくるまいて内に入れて、「そなたをこんなにしたのは皆妾の罪です」と云つてゐるうちに、蘇生して来た。娘が驚いて奔り出て来た老婆にその由を告げると、老婆は「早く逐ひ出せ」と云つた。娘は態度を改めて云ふのには、「それはいけません。此の方は良家の若様で、昔は高車に乗り金装を持つて妾の處へおいでになりましたが、一年足らずに使ひ果させ、

その上だまして捨てゝしまひましたが、人間の所爲ではありません。そして志を失つて社會の交際も出来ぬやうにさせました。親の愛情さへも絶えて棄てられ、こんな妾にさせたのは妾の爲めだとは世間で皆知つてゐます。此の方の親戚は朝廷に大勢居ますから若し知られたらどんな禍が来るか知れませぬ。妾は生てから二十年間お母上様の御世話を受けましたが、二十年間の養育料を差上げますから、どうか妾の身を自由にして下さい。妾は此の方と別に家を持ちます。それも近くにゐて、朝晩御機嫌を伺ふつもりでゐます」と娘は老婆に給與した残りの百金で空屋を借りて大切に公子を看護した。翌年は殆んど本の身體になつた。

公子が丈夫になつて元氣も善くなつたので、娘は勤めて昔の學問を勉強させた。十中の七八は忘れてゐた。娘は大金を出して澤山の書物を買つて、三年の間一切俗事を忘れて晝夜學問に専念させた。天下の書籍は殆んど讀破した。文官試験に應じて見事優等で及第し、成都府參軍に任ぜられた。任地へ出發しようとした、時娘は公子に向つて、「貴郎もやつと本當のお體におなりになつて、妾の勤も果せましたから、これか

らは歸つて老母に孝行したいと思ひます。貴郎は豪族のお姫様と御結婚なさいませ。妾はお暇を頂きます」と云ふと、公子は泣いて、「御身が若し僕を棄る氣ならば僕も生きては居ない」と云つた。娘は容易に意を翻さなかつたが、公子が餘り熱心に同行を請ふので、「それではお送りして参りますが、劍門まで行つたら回らして頂きます」と云つた。公子も之れを承知した。

一月餘りたつて劍門へ来た。偶然父が勅命を受けて常州から成都尹兼劍南採訪使に轉任し、十二日後に此處へ来た。公子は旅館で父に逢つたが、始め父は公子を認めなかつたけれども、祖父の官や名前などを知つてゐるので、始めてわかつた。しばらく泣いた。公子は顚末を委細話すと、父も喜んで始め通りの間柄となつた。父は娘を劍門に留めて別館を築いてそこに置いた。媒酌人を立て、二姓の好を通じ手篤い結婚式を擧げて娘を迎へた。娘は善く婦道を修めて親に孝養を盡した。兩親の歿後、その孝行が天聰に達して、特旨を以て沂國夫人に封ぜられ、四人の子は何れも皆出世した。

特 ☆ かていの
☆ 輯 じやうど

家庭の主婦として

岡本かの子

文化が進むにつれて

家庭に於ける主婦の仕事も複雑になつて来る。昔は單調な家事を毎日繰返して居れば事足りたので、襦袢の長火鉢にせつせと艶布巾をかけて、光澤の出るのを楽しんでゐられたが、今日ではそんな暇があれば少しでも新しい知識を吸収し、變つた工夫を凝らすことによつて家庭生活の内容を豊富にしやうと努めるやうになつた。

今日、主婦が努力を惜しみさへしなければ、家庭生活の内容を豊かにする道はいくらでもある。

例へば住居に就いて考へて見るに、住居といふものを、單に人間がその中に住むといふ考へだけで満足するとすれば、これ程簡單なことはないのだが、それは餘程昔の考へ方で、今日ではもつと高尚で複雑な文化的意義を持つやうになつた。住居は子供にとつては成育の温床であり、おとなにとつては社會生活の本據である。だから主婦は住居が家族の生活に及ぼす肉體的・精神的影響を充分に考慮して、よりよき發育の温床たらしめ、生活の本據たらしめるやうに心懸けるべきである。それには先づ主婦が自ら高尚な趣味と、豊かな情感と



七人の子供達

お父さんとお母さん

太郎 花子 次郎 三郎

四郎 光子 良子

お母さんは何時でも、とても澤山のことをしなければならぬので、一日中絶え間無くお仕事があります。

子供達にご飯を食べさせなければ

豊富な實際的な智識とを蓄積せねばならない。

住居は人間の安息所

であるから、何よりも先づ清潔で衛生的でなければならぬことは云ふまでもないことであつて、主婦はそのために保健衛生上の實際的智識を必要とする。だが家の中がどんなにきちんと整頓して掃除がきれに行き届いてゐても、それだけでは女が顔を洗つただけで化粧をしないのと同じである。化粧といふものは自分の顔を美しく見せることだけが目的ではなく、自分自身の氣持をさつぱりと小綺麗に装ふことのためでもある。掃除の行き届いた整頓した家には次にそう云つた意味の化粧をしなければならぬが、それには主婦の教養なり趣味なりが最も端的に表はれるのであるから、主婦としては一番關心甲斐があると同時に一番骨の折れる仕事でもある。徒らに高價な調度を飾り立てることなどは往々にして毒々しい厚化粧と同じやうな低劣な惡趣味に陥り易い。例へば、床の間の活け花の如きも、高價な草木をその度毎に買はないでも、家の周圍に生へてゐる庭木の枝

に少しの下草を摘み取つて配しただけで立派な活け花が出来上る。それは結局主婦の情趣の深淺によることである。

婦人雜誌などで得た智識

を以つて、何事も筋書き通りに取り運び得々としてゐる形式主義者が世間には可成りある。ある夫人は洋館の床にはワックスを塗れば光澤が出ていつもきれいであることを知つて、毎日せつせとワックスを女中に擦り込ませた。お陰で床板は鏡のやうに艶々と光つてはゐるが、來客は云ひ合せたやうに滑らかな廊下で転倒して仕舞ふ。その度毎に夫人は「皆さんお轉びになりますわ」と云ふだけで、一向ワックス塗りを止めない。こんなのは典型的な形式主義者で他人の迷惑なぞてんで意に介しないで、只管形式だけを整へることに忠實な情感の乏しい主婦である。

これと同様のことが

衣食に就いても云へる。主婦が常に衣食住に對して新しい智識を取り容れて變化を多くすると同時に

ばならないし、汚れたお顔や手は洗つてやらねばならないし、足袋や靴下を繕つてやらなければならぬ……それに小さい子供達には御本を讀んでやらなければならぬのに、大きい方の小供達は遊びたがるし……全く、お母さんは獨りで澤山のことをしなければならぬのです、お母さんですもの。

まして、この話に出る七人の騒がしい、元氣な、面白小供のお母さんのやうな方は、それはく大變です。太郎の靴下を直してやつたばかりなのに、次郎が轉んで着物をやぶいてしまふ、四郎がやつと寝ついたと思ふと、良子が泣きだす。

或る晩、太郎、花子、次郎、三郎、四郎、光子、良子の七人兄弟のお母さんは、お父さんがお家へ歸つて來た時、頭を抱えながら、

に、それに高尚な趣味と豊かな情愛を加味するところを忘れたければ、家庭生活の内容は眞實に充實したものとなるであらう。草花を栽培するのに、夫々の草花の特質に適應した土壌と肥料が必要であり、また充分な日光と風と水が必要であると同様に、家庭に在つて家族がすく／＼と成長したり社會に出でて充分に驥足を延ばして活動出来るやうにするためには、主婦の眞心の籠つた家政によ

る家庭生活が何より必要である。人間生活に於ける衣食住は植物に於ける土壌、肥料、日光、風水等に於たるものである。家族にこれ等を適當に供給する役目は主婦のものである。だから主婦は何事をもなすにも自我を棄て、常に家族全體の心を己の心として主婦として役目をなし遂げるべきである。

ふたつの感想

岩野喜久代

或る小學校で實際に

あつた話だと聞きました。上級男兒の修身の時間に、先生は今日の主眼である節儉の徳目について、熱心に説き聞かせて居りましたが、一通り話の本筋が終りますと、卑近な實例をもつて獅子供

たちの頭に儉約の思想を涵みこませようとしたらしく、

「君達は學用品を粗末にしては不可ない。鉛筆などでも小さくなつたからとて、捨てゝしまつては不可ない。使へなくなるまでは用ひるのが、儉約の趣旨に叶ふのだ」

ため息をついてゐました。

「どうしたんだね？　ちつとも元氣がないじゃないか。」とお父さんが仰言つた。

お母さんはお父さんを見て、「とても疲れて仕舞つて、背中が痛くつて」と云ひました。

お父さんは、何か考へてゐるやうな風でしたが、

「どうも、この儘ではいかんよ。

お前は家の腕白共に澤山過ぎる程仕事をさせられてしまふのだからな、と云つて……」とお父さんもため息をなすつて、「子守をおく程の餘裕もないし……」

「三郎には新しいマントがいりますし、太郎は洋服の肘を破いてしまつたのです。」とお母さん、「今晚中にそれを繕つて仕舞はなければなりません。」お父さんはお母さんを優しく

と云ひきかせましたところ、一男児が突如手を擧げて、

「先生、家のお父さんは短くなつた鉛筆で書くと能率が上らなくて困るから止めなさいと云ひます。」

と申しました。若い熱心な先生はこの反問にすっかり間誤ついたさうですが、この子供にどう納得の行くやうに説明したかは、生憎私は聞き洩らしました。恐らくこの子の父親は會社か工場でも經營してゐる人で、始終能率とか効果とか云ふことを家庭にあつても口にしてゐたのでせう。

私はこの兒童の言葉

を通して現代社會人の物に對する考へ方が、解つたやうな氣がいたしました。なる程短くなつた鉛筆は能率が上らないでせう。古い衣服に骨折つて縫ぎをあてて、着られるだけ着る勞力と時間を考へたら、むしろ安い新しい布れを買つた方が經濟的でせう。物資に乏しかつた昔に比べて、現代はあまりに生産力が過剰になつて來て居ります。それが爲め私どもの母や祖母たちの時代には考へら

れなかつた消費生活の甚だしい浪費が起るところに見受けられます。

私はこの現象を好ましいものに思へません。

勿論過去の日本人のしみつたれた位極度につつましい生活よりも、豊富な文化内容を持つ現代の生活の方がはるかに上等であり、望ましい事であるとは思つて居りますが、その半面、物に對する感謝の念、敬愛の情のひどく缺乏してゐる有様を悲しく思はずには居られません。

私はこの小學生の話を聞きました時は、あらゆる修身の徳目に對して、人間の功利的な立場を離れてもつと深い見方がなければならぬとつくづく思つたのでした。私自身は佛教的な視野からすべてを見て行きたいと思つて居ります。儉約の一項を取り上げましたが、單に物が惜しいとか、家を富ます爲とか國家の不經濟だとか云ふ程度の説き方では心に響きません。あのお若い先生が、佛教の本質をよく知つてゐる方でしたら、皮相な能率論など容易に説伏せたこととせう。物と云へども一つの使命をもつて世に出た以上は生命のあるもので、その使命を完了させ生命を尊重すること

たはつて

「今日はもう仕事はおやめなさい。太郎には明日はよそ行きの着物を着せて置きなさい。……私は今考へてゐることがあつてね。」と言ひました。

「何んですの、どんなことをお考へになつたの。」

「今日、私は他處の家庭のこと聞いて、この家もそう云ふ風にやれないこともあるまいと思ふのだ。」

お前は朝晝子供を學校や幼稚園へ連れて行つたり、連れて歸つたり着物を着せたり、脱がしたり、食事の世話をしたり、食べさせたりお前の食事をする時間もありはしない。私は時々考へるのだが私達は兎に角何に不自由なくしてゐるのに、お前は自分の事は何に一つ出来はしないと。」

お母さんは笑つて云ひました。

は、人に對して同様でありたいものです。

觀門大師が一壺の茶を流したのを大苦心をして川下まで追ひかけて漸く拾ひ上げた話や蓮如上人でしたかが、落ちてゐる一枚の紙を押しただいて「あな勿體なや、佛法領のものを粗末にするかや」と仰せられたお氣持には、單なる儉約以上の尊い心構へが光つて居ります。

新聞の女性相談と云ふ

ものを折々私は、興味を持つて讀むことがあります。中には浮薄な呆れ果てた、ふざけ切つた相談もあります。又いろ／＼書かれてあるものを讀みますと、世の多くの婦人達がどんなことに悩み如何なる生活を求め願つてゐるかが切實に胸に響いて來るのを覺えるのです。其の相談の個々の事情は多種多様ですが、戀人に逃げられた娘、良人の放蕩に泣く妻、三角關係に悩む女、或は第三者の爲に夫婦の愛の完璧を期しがたい者、子供を抱へて生活苦にあえぐ寡婦等、愛慾と經濟に關するものが最も多く取上げられて居ります。

若し男性相談欄と云ふものが出來たとしまして

も、これほど愛慾の問題が眞剣に集つては參りません。男子は仕事が生活内容の大部分を占め、女子は愛慾が生活の大半を占めると云はれてゐることが、如實に裏書された様な氣がします。その上現在の社會では婦人の經濟生活力がほとんど無力に近いので、男性に依倚する結果、良人の愛を失つた妻は同時に經濟的にも窮迫に陥られる場合が少くありません。その爲婦人の苦痛は二倍、三倍に押しひろげられるやうです。

私はまたそれらの悩

みに對する名流婦人たちの解答ぶりをも興味をもつて讀んでゐます。敬重すべき意見もありますがまた對立の世界からのみ眺め女權伸張の氣魄を眞向から振りかざして「そんなダラシのない男とはきつぱり別れなさい」と大上段に極めつけるのや現狀を慰めるにも足りない理想論や、或は極めて常識的妥當的で危氣のない解答ながら何かもの足りないはつきりしないもの、などを拜見しながら何時もひそかに思ふことは人情の裏も表も知りつくして、しかも大處高所から眺め、苦惱を根本か

「母親となれば誰れでも皆んなかうですわ」

「然し、それは良いことではないし、第一お前の身體が續かない。明日の朝からはこの家のやり方をすつかり變へてしまふのだよ！まあ良く聞いておくれ。三人の小さい子達は大きな子達に特別世話をして貰ふのだ。大きい子は小さい子を學校へ連れて行つて、また連れて歸るのだ、着物を着せてやつて、寢床へ連れて行く、ご飯を食へさせてやつて、遊んでやる、簡単に云へば、お前がやつてゐた一切の面倒を小供に見させるのだ。私も今迄、こんなことに全く氣が付かなかつた。かう云ふ風にやつて行くと、お前は休んだり、本を讀んだり、ピアノを弾いたりする暇が出來ると云ふものだ。そして子供達は自分

ら指導して適切な解決を下す釋尊のやうな方がゐられたらと思ふのである。また相談を寄せる婦人たちの愛と聰明と忍耐の著しく缺けてゐることも見逃すことが出来ません。

すべての人々が愛と聰明と忍耐の徳即ち佛教の教への根幹である慈悲と智慧と忍辱の精神を身にしめて、世に處して行きましたなら社會の悲劇はずつと少くなるだらうと思ふのです。一家和合の

秘訣と申すのも世間と交際する上手と云ふのも、根本はこの精神より外はありません。婦人かもつと聰明で愛がひろやかに豊かで且つ堪へ忍ぶ強靱な精神力を養つてゐますなら、婦人雜誌によくある良人操縦法だの圓満交際法だの、娼婦まがひの粉飾術などと云ふやうな俗記事に身を入れなくて一向差支へない筈です。

母になる人の養生

醫學博士 大橋りゆう子

春から初夏にかけて

大へん妊娠の多い季節でございます。これは寒い冬ごもりの時季が明けて、暖い氣節への變化と安靜にしてゐた所へ春のうき立つ氣候で氣分が朗らかに動き出した關係、つまり、氣候と精神的な

關係によるものでせう。

兎に角この季節に於いて、みもちになられた御婦人方は、特に御注意なさいませんと取りかへしのつかない事になつてしまひます。

とかく陽氣のよい爲に一番大切な一、二ヶ月をおとなしく養生出来ないで、仕事をしたり遊んだ

達のするべきことが解るのだよ」

お母さんは一寸考へてゐましたが「本當にそんなことが出来るでせうか。」と云ひました。その顔には、優しい、喜ばし氣な色がたゞよつてゐました。「小供達が皆んなで働いて、お互ひに助けあつたら、この考へはとても立派なものだと思ひますわ。」

「勿論だよ。始めの中は慣れないから間違つくだらうが、七人共仲が良いのだから、すぐ慣れてしまふよ。大きい子が小さい事をいたわつてやれば、同時に、今まで考へもしなかつたやうなことを澤山教ふことになるのだ。」

お母さんも少しのり氣になりました。「さうすると、太郎には四郎の世話をさせるのですね、あれは四郎を學校へ連れて行つてやれますよ。ほんの一寸の廻り道ですか

りし勝ちです。こうした、未だ固らない時季の過
勞が流産のもとなのです。

尊い生命を生かすも殺すも母の注意一つです。

すこやかに新に生れ出る生命を育てるのが女性の
誇であり母の責件でございます。

とかくおこたり勝ち

な妊娠初期の養生を二三、常識的に御注意申上げ
ませう。

これから初夏にかけて氣候が暖かくなりますと
どうしても外出が多くなりますが之は充分おつゝ
しみになつた方がよいと存じます。もし出ると致
しましても乗物に御注意なさいまし。少々の所な
ら歩いた方がよいのですが、乗物はタクシーやバ
スは動揺が多いから乗らない事です。省線や市電
なら少しはよいと思ひますが長途の汽車旅行など
は絶対に御注意にならねばなりません。

又暖かくなりますと不注意から却つて冷える様
な事がありますから用心すべきです。

特に悪い勞働の種類としては腹に力を入れるも
の、たとへばせんたくとか、重い物を持つとか、

腹壓の加はる運動は禁じなければなりません。

腰かけを用ひるよりも座つた方が冷えなくてよ
いと思ひます。

妊娠致しますと自然に腰部の出張るのを苦に致
しまして特に若い方など格好よく見せる爲にお腹
に何も巻かずに薄着して外出する様な事は充分注
意して下さい。

婦人の美は腰部のふくよかな所にこそあるので
ございまして腰部の大きい事が決して恥づかしい
事ではありません。生理的に好い體格こそ鼓張す
べきですのに、殊に日本の婦人方は却つて虚榮を
張つたりして體をこはすことなどは笑止の沙汰で
ございます。

こうした外部的な

色々の過勞や不衛生は勿論注意しなければなりま
せんが、喜、怒、哀、樂と言つた様な内部的精感
動も又大へん體に影響致しますから御注意なさい
ませ。普通言ひます母胎教育の大事な事は言ふま
でもありません。妊娠中にはえらい人々の額等部
屋に飾つて常にそれが目にふれる様にすると何時

ら。」

『それも悪くないな。足は達者だ
からな。それから、小供達は三十
分早く起きて、自分で床を上げる
大きい子は小さい子のを手傳つて
やること。』



『さうですわ。きつとうまく行き
ます。』とお母さん『とても楽しみ
ですわ。それから、……花子は
光子の世話をさせませう。次郎は
良子ちゃんの世話をさせて……』
『うむ、それは良い組合せだ。次

か氣持に餘裕が出来自己の精神修養になるのみならず、生れる子供も又その様な氣持の持主として將來が期待される事は確かです。妊娠中心の平和を缺いてゐた時の子供は又憂鬱な妙な子供の性質になります、斯る理由で子供の主なる性質は妊娠中の母親の氣持ちによると云つても過言でありません。

食べ物と致しましては肉類よりは野菜類がよいのですが、特にカラシ、胡シヨウ、酒類などの刺激物は流産のもとです。

妊娠期には又腎臓炎と脚氣を引き起こし易いのです。それには不斷の注意が肝要で、殊に五、六ヶ月頃になつて急に出る事がありますから一月に一、二回は必ず尿の検査をして蛋白質の出る具合や脚氣の有無に注意しなければなりません。

腎臓炎の症状は脚の方がむくみ、胸が動悸し、ひどくなりますと、顔はむくみ蛋白尿性網膜炎を起して目がかすみ字が讀めなくなります。そんなになりますと、もう生命さへ危くなつて來ます。腎臓炎の場合は産後の出血多くひどい場合にはもう薬や注射ではきゝません。で遂に貧血のため死

をまぬかれません。特に日常慢性の腎臓病のある人は妊娠したら急に進みますから直ちに醫師に相談し治療をおこたつてはいけません。

この病から更に子癇

を起しますとお腹の子供は死にますし、自分は臍の様に無意識状態となつて手術しなければ見を出す事さへ出来なくなります。こんな悲惨な病氣も不識々々の内に起りますから不斷の注意が絶対に必要となります。それには尿の排泄を良くする事が最も大切で、その目的には牛乳を少くとも一日一合宛飲む事であります。

脚氣は始め足がしびれ次第に、手、下腹部までしびれて來ると危険です。脚氣は御承知の様にビタミンBが缺亡した爲に起る病氣ですから、ビタミンBをふくむ食物、即ち第一に胚芽米、玄米、半搗米など最も主なるもので、尚野菜、果物等も主役を致します。中でも半搗米が一番よいと思ひます然し割合に消化が悪いですから胃腸の弱い人には胚芽米が最良です。ビタミンBは又脚氣豫防ばかりでなく、胎兒に必要なものですから充分取

郎と花子は小さいのを二人それぞれ幼稚園へ連れて行ける。まかせておいても大丈夫だ、道も人通りが少ないし。私等が小供達をそんなに信賴してゐることを知つたら、あれ達はきつと喜ぶよ。」

「三郎だけが、とり残されて仕舞ひましたね。ふくるでせうね。」

「さうだね」とお父さんは考へて「では毎朝あれには、私達にお茶を入れさせることにしやうよ。な

にか、お前、三郎にさせてやらな」と、自分だけ除け者にされたと思ふからな。自分の世話をする子供がいないと承知しないかも知れないな。」とお父さんは笑つて云ひました。

「えゝ、それにあれは元氣ものですから。でも……」とお母さんはお父さんの手を撫でながら「三郎にも、もう少ししたてば、世話をす

る必要があります。

又妊娠中には母胎のカルシウム分が胎児の骨の構成に取られますから歯がゆるみ、歯肉はひどくなり、その他の骨の成分も弱りますから、出来るだけカルシウム離を取る事です。例へば、イワシ、干物もなるべく骨ながら頂く事、乳酸カルシウムを飲む事等です。尚脚氣の豫防としては妊娠中の排便が最も肝要とも申しませう。

幸にお産が無事にすみ

まして母の脚氣の爲に嬰兒は知らぬ間に犯されて、便が青みがうつたり、粒々になつたりします。別にその母が乳を飲ませなくとも母體にビタミンBが缺乏してゐた爲に嬰兒は、こうして乳兒脚氣にかゝつてしまふのです。こうなればどんな消化劑をやつても効なく心臓脚氣から脚氣衝心を引き起して突然死んでしまひます。

こんな具合ですからお産後も脚氣と腎臓炎は更めてよく調べてみなければなりません。一般に分娩すると腎臓炎は軽くなりますが、脚氣は割合に軽くなりません。

寒い冬が明け、陽春から初夏にかけて、自然に體のしまりがゆるんだり、陽氣にまかせて無理な労働をしたり、遊び過ぎたりしない様に、特に新しい生命を宿してゐる御婦人方には注意して頂きたいものでございます。

参詣の心得

お宮やお寺へおまゐりした時、口をすすぎ、手を洗つてから拜むのは、大へん結構なことです。右手に柄杓を持ち、左の掌にお水をうけて、口をゆすぎ、手を洗ふやうにいたしませう。杓柄を口につけるのは衛生上からも作法上からもよいことではありません。

遠足の心得

遠足、ハイキングなどに出かけてすぐに足疲れてしまふ人は、つま先に力を入れて早足に歩くからです。長い距離や山坂などを登るのには、足の裏全體を確り地面につけて、急がず、無理せず、ゆつくりと登ることです。あまり大股などせず足に無理させないこと、さうすれば休まずに進んで行けますから結局早く目的地に着きます。

る子供が出来ますわ。』

『うむ、さうだつたな』とお父さんは立上りながら『これで私もさつぱりした。おや、もう一時間ばかり話込んでしまった。子供達には何時話してやるかな。』

『明日の朝御飯の前が良いでせう。』

『よし、あしたの朝は、私が廿分ばかり早く子供達を起して云つてやらう。』起きろよ、さあ、今朝は七時半から八時まで家族會議を開くのだ。お母は疲れてゐる。お前達はきちんとやつて行くんだぞ』さうすれば、お前はもうごちや／＼したことをやらずに済むのだ。』

この話はまだ続きます。七人の子供達はお父さんの話を聞いて、どう云ふ風にやつて行くてせうか。次號を御覽下さい。

愛 あい

憎 ぞう

野原完二郎

福田

勇 畫



勇

黒い影

了石が托鉢から戻ってきたのは、夜も可成り更けてからだつた。

「えらく冷える——身體が凍えさうぢやわい」と、白い息を吐きつゝ、庫裡の櫃に腰を卸して、霜柱の凍りついた草鞋の緒を解きかゝつたが、

ミシリ、ミシリ、ミシリ、……

その時——人氣のない筈の本堂に當つて、妙な足音、

「オヤ？」

了石は、ふと耳を欬てた。

「ふうむ——賊かな」

味噌磨りも、納所も、住職も、一人で兼ねなければならぬ程の貧寺だ。よもやとは思つたが、ただ一つ、この淨閑寺の寺寶ともいふべき金の阿彌陀如來像が本堂には祀つてあるのだ。(汚されてはならぬ——)

と木影を踏んで、本堂へ急いだ了石が、カラツ——と、朽ちかけた杉戸を開けた途端、

「あッ——」

と、黒い影が、いきなり須彌壇の前から、飛び退いた。そして、蝙蝠のやうに、窓に飛び上らうとするのを見ると、

「こらッ——」

大喝してその背後から組みつき、ズルズルと引卸した。——同時に、賊の懷中から、轉がり落ちたのは、案の定尊い如來像、

「うぬ、盗み居つたな——」

年はとつても、變遷たる了石だ。忽ち、賊を膝下に組み伏せ、

「顔を見せろ」

賊はしきりにもがいた。撥ね起きやうと、必死の努力を拂つてゐるうち、被つてゐた手拭が、バラリと解け、窓から差込む寒月の光に、顔が露はになつた。

「おゝ……そ、そなたは……」

その顔を見た瞬間、了石の唇から意外さうな聲が洩れた。

「源……源吉ではないか」

源吉といふのは、近くの下谷龍泉寺町に住む、左官の職人で了石とは顔見知りの間柄だ。

「うゝむ、そなたが賊を……」

と、ちつと見つめる了石の視線を、源吉は避けるやうに坐ると、

「和尚さん、見違してやつてお呉んなせえ」

と、頭を垂れた。

「あつしは……あつしだとして、好きこのんで、こゝこんな眞似をしたんぢやねえんです」

「當り前ぢや、誰が好んで、賊を働く奴が居る——」

了石は烈しくいふと、轉がつてゐた如來像を取上げ、拜んでから須

彌増に安置して、

「佛罰を知らぬ奴……永城に救はれぬぞ」

源吉はいよく膝を堅くした。

「済みません、和尚さん——こ、この通りだ」と、ひれ伏し、

「あつしが、このまま牢に繋かれると、病氣の阿母弟妹たちは、野

……野垂れ死にしなければなりません」

寒 月

成る程、源吉の言葉には、嘘はない。——母のおつねが、三年越し

の癆咳で寝込んでゐることは、了石も知つてゐる。そのうへ、二人の

弟妹は、腕白ざかり——家計の足しには全然ならない。

「源吉は、感心な奴だ。——まだ二十歳にもならねえといふのに、病

人や弟たちを抱えてひとりでも角も家計を營つて行くんだ。みんな

な若え奴等、吉原や矢場へばかり行くのが能ぢやねえ。ちつとは、源

の字を見習ふがいい——」

と、職人仲間では、常日頃からの褒められ者だつた。

何しろ、父の要造は、これも左官の職人だつたが、ひどい飲んだく

れで、その酒が祟つて、數年前に卒中で他界してしまひ、母の病氣

も、その當時の苦勞から惹き起されたものであつて見れば、源吉は身

を粉にしても働かなければならなかつた。

「なに、太陽様は見透しだ——働いてさへ居れやそのうちにはきつと

いい事があらア……」

しかし、源吉は少しもそれを悲しまず、かう言つてよく働いた。い

や、働くばかりではない、仕事の歸りには、毎日必ず薬を買つて戻つ

て、夜も眠はず母の看護に精を出したのだ。

——ところが、これ程に實直な源吉が、半年程前から、急に仕事を

怠け出した。三日に一度、四日に一度は、きつと仕事を休んで、手拭

を肩に朝風呂などに行くやうになつたのだ。

「お前そんなこつて阿母に薬を買つてやれるのかい？」

と、時に親方が注意をしても、

「心配ご無用——親方、あつしは近ごろ、割のいい内職を見つけたん

でねえ」

と、意に介さない。

「さうかい、それならまあいいが、しかし、その内職といふのは何だ

い？」

「いやそれは言えねえ——こればかりは俺の飯だ、誰にきかれても授

へられねえ。くどく訊かねえでおくんなせえ」

と、しかし何故か、源吉は、それについては、口を緘して語らない

のだ。

「可怪しいぢやねえか、源の野郎、この頃又餘計に怠け出しやがつ

た。内職があるといふけど、一體どんな内職だらうなア……」

「俺もたうから不思議に思つてゐるんだ。壁を塗るより能のねえあい



國

つが、そんな割のいい仕事が見付かるとも思へねえのに……」
 からした仲間の噂は、次第に高くやがては、かれに疑惑の目を向ける者も出てきたのであつた。

「あの野郎、ひよつとしたら、悪い事でもやつてゐるんぢやあるめえか——」

——了石も、からした噂を、時折り耳にしてゐたので、瞬時にすべてを悟つたのだつた。

「源吉！お主は、今夜が初めての盗みではあるまい？」

「えッ、いや、そんなことは、和尚さん、そんな事はねえんです」
 源吉は、慌てて否定した。

「うん、さうか、それならそれでもいいが……」

と言ひかけて、何事か思案してゐた了石は、

「しかし、源吉、たとひ今夜が初めての盗みでも、悪事は悪事ぢや、見遁すわけにはゆかぬぞ……」

「あッ……いいえ、和尚さん、見遁しておくんなさい！俺は……俺はたとひ殺されても構はねえが、俺が居なけれや、阿母が……小さい奴等が可哀相だ。——阿彌陀様を盗まうとしたのも、みんなその爲だ。俺が一文だつて、身につけやうとしてやつた事ぢやねえ。和尚さん、みんな、阿母達に白い飯を喰はせ、薬の一つも餘計に買つてやりたかつたばかりだ。和尚さん、後生……今夜のところは、どうか見遁して……」

と、狂氣したやうにいふ源吉の目には、キラリ泪が溢れてゐる。

「ならぬ！」

が、了石は、顔色一つ動かさない。

「えッー」

「たとひ事情はどうならうと、賊を見遣したとあつては、僧として世人への示しがつかぬ！」

「……くそ坊主！」

源吉は、それを聞くと、咽喉に詰まつたやうな聲を出して、パツと身を翻して、再び遁げ出さうとした。

「ならぬ！」

が、それより早く、武道の嗜ある了石の腕が、源吉の脚に延びて、源吉の體は前のめりに轉倒してしまつた。

「あつー」

「源吉、年貢を収めろ！」

その上に馬乗りになつて了石は、ねぢ曲げた源吉の兩腕を、素早く嚴重に縛し、

「身から出た錆ぢや——二三年牢へ入つて、罪の垢を落して來るかい」

「ち、ちく生め、よくもこの俺を……怨みは、き、きつと晴らしてやるぞー」

蒼白な面に眦を決して、源吉は、無念さうに叫んだ。

——寒月はいよく、牙え、時々不氣味な遠吠が聞えるのは、恐らく墓地の骨をあさりにきたのら犬のそれだらう。風が木々を渡る——

切解き

「あゝ、後一年か……永げえなア」

素拾一枚、繩帶締め、見る影もないまでに衰へた顔を、土に埋めて、又しても格子を搦んで呟いてゐるのは、例の源吉だつた、

「阿母は、弟たちは、一體どうしてゐることか……俺が穢いで居てせえ、喰ふや喰はずの始末だつたんだ。きつと……きつと、この世にはもう居ねえに違えねえ。」

源吉はあの夜、金の如來像を盗みに、淨閑寺に忍び込み、つひに了石に捕えられると、そのまゝ上役人に引渡されてしまつたのであつた。

時の奉行は、名奉行の聞え高い大岡越前守——鋭い眼光に射すくめられるやうに、源吉は、白洲の砂利に額を埋めて何もかも白狀してしまつた。

實際かれは、職人仲間の噂通り、仕事を怠出したのは、盗みを始めたからで、淨閑寺へ忍び込んだのも、決してそれが初めての盗みではなかつた。

しかし、それもこれも、かれ自身の爲ではなかつた。——一圖に、母の病ひを癒し、弟妹たちに、飢い思ひをさせたくないばかりだつ

た。

實際、いかに腕がよくて、身を粉に働いても、堅氣の左官職人の稼ぎは知れてゐる、親子四人が喰つて行くだけがやつとだ。まして年から言つても、かれは一人前の職人ではなし、それに阿母は、永の思ひ——醫者も既に藥代を諦めて、見舞つて呉れる者がない。

(あゝ、どうしたらいいんだ……)

眠れぬ夜半の床の中で、かれは幾度泣いたことか。

(このまま親子四人が野垂れ死するなら、俺ひとりが死んだ氣になつて……さうだ——)

かれは、ここで決心してしまつたのだつた。そして折を見ては夜の隙ぎを始めたのだが、決して餘分の金は盗まない。——阿母に満足な藥が買つてやれて、弟妹達に白い飯が喰はせられれば、それ以上の慾はないのだ。

それだけに盗みはしてゐても、心は案外平靜で、決しておむねるわけではないが、了石に捕へられた時も、許されるものと思つてゐた。ところが、案に相違して、この始末——名奉行の越前守も、かうした事情を知りながら、かれに二年の牢詰を科したのだ。

(入れ墨か、叩きで済むと思つてゐたのに……)

——何もかも豫想がはづれて、牢内の苦役が、かれを苦しめれば苦しめるほど、かれの了石に對する怨みは、烈しくなつた。

(この……この怨みは必ず晴らしてやるぞ。僧は人を助けるものと、

昔から相場がきまつてゐるんだ。それを、却つてかうして俺を苦しめやがつて、第一、あの時俺ア盗みはしなかつた——あの如來は、ちゃんと無事ぢやねえかッ)

かれは、齒をバリ／＼と鳴らした。

(かうして牢へ入れられたからには、たとへ自由になつたところで、満足な顔しちや人中を歩かれねえ。——俺アもう一生科者だ、二度と再び職人にや戻れねえんだ。ちく生ツ了石奴、どうしてくれるかッ) この時、急に牢門が騒がしくなつた。——右往左往する牢番の足音、遠く近く叱咤するやうな役人の聲。

「何だ、何だ」

「馬鹿に騒がしいが、牢破りでもあつたのか」

鮪のやうに板の間に寝てゐた相牢の囚人が、起き出して叫んだ。

——と、突如、奉行所の提灯を牢番に持たせた役人が、格子の前に立つて、

「こら、皆の者、よく聞け。——本郷から出火いたした火事が、江戸各方面に延焼いたし、當傳馬町も危い。これから切解きをするから、左様心得ろ！」

「ワアーッ」

囚人達はそれを聞くと、一齊に聲を擧げて狂喜した。

「こら、騒ぐな！だが切解きは三日間の掟ぢや——三日間のうちに戻らぬと、重い罪科に問はれるぞ。だが、この掟を守る者は、ご慈悲に

よつて、罪一等を減じられる。——皆の者分つたか！」

「へーえ」

四人は一齊に頭を下げた。

江戸の三分の一を焼いて、俗に十萬八千餘人の焼死者を出したと言はれる、有名な明暦の大火であつた。

母子對面

——だが幸ひ、下谷

龍泉寺町は、類焼を免れた。

「阿母ア……阿母ア……」

……

切解きによつて、傳

馬町の牢を放たれた源

吉は、火の海をくぐり

ながら、夢にも忘れら

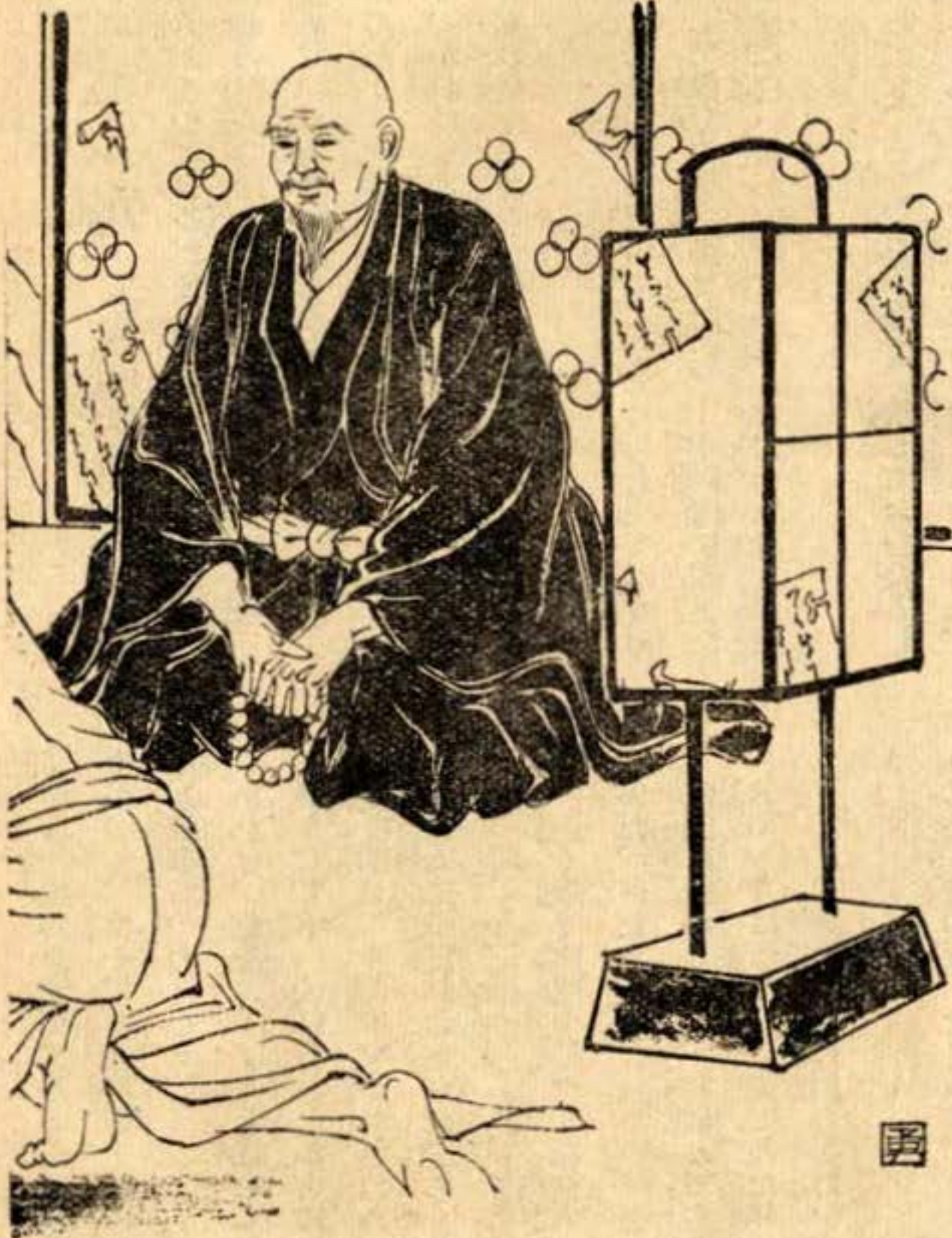
れなかつた我が家へ、

眞つ直ぐに飛んでき

た。——了石に怨みを

晴らすことも、さるこ

となから、まづ第一に



母や弟妹達の様子が氣遣ひだつたのだ。

「阿母ア、居るかい……俺だよ！」

火事騒ぎに、附近の人々は、起き出して、街に溢れてゐるのに、何故か源吉の家だけはビタリと戸がしまり、叩いても押しても開かないのだ。——さつと、源吉の胸に不吉な豫感が掠めた。かれは夢中になつて、戸を蹴破つて、内部に飛び込んだ。

「あつー」

かれが呆然と立ちすくんだのも道理、家の内部は、ひどい荒れ方——壁も障子も破れ放題、そして家財はおろか、母の影すら見當らないのだ。空家——さうだ、儘かに空家だ。

「うーむ、ち、ちく生ッー」

源吉は、唸めいた。——恐れて居た事が、たうとう現實になつてしまつたのだ。

傳馬町の牢に繋がれて、一年母や弟妹達の暮し向について、一日として不安を持たない日はなかつた。泣いて母達の身に思ひを

馳せぬ日はなかつた。それもこれも、家族の無事を切に祈ればこそだ。——たとへ、乞食をしてでもいい、盗みをしてでもいい、自分が再び婆婆に出るまで、命をつないで居てさへくれれば、その苦勞を百倍の幸福に返して、きつとみんなを喜ばせるこの念願を唯一つのかれの命の糧として苦役をつとめて居たのだ。

しかし、その念願も、喜びも、無になつた——母や弟妹達は、生活に負けて死、……死んだのに違ひない。

(あゝ……) 源吉は、目の前が眞暗になつてしまつた。——が、湧沓として頬に傳ふ泪がかれた時、腹の底から又しても湧上つてきたのは、その悲しみの淵に、無惨に蹴落した、あの了石への復讐心だつた。



戸を靜かに繰つて暗い廊下を這つて進んだ。懷中には、何處で手に入れたか、出刃がピカリと光つてゐる。

——と、廊下の突當りの部屋から灯影が洩れて、ひそかな話聲が聞えてくるのだ。(オヤ?)

住職の了石以外、無人の寺の筈だ。源吉は不思議に思ひながら、破れ障子の蔭に、ビタリとひそんで、耳を澄ました。

(ち……ちく生ッ、了石の奴、たうとう俺たちをこの態にしやがつた！生……生かしてなぞ置くものか！)

了石に對する憎怒と憤激の塊のやうになつて、かれは再び鐵砲玉のやうに、その家を飛び出した。

下谷三の輪の淨閑寺は、しばらく見ぬ間に、土堀のくずれは大きくなり、蔓は一層落ちて、夜目にも貧窮振りがはつきり分る。

(ふん、ざまを見やがれ——)

源吉は呟きながら、勝手知つた庫裡の裏口に廻り、締りもない

「……方丈さま、何とお禮を申上げてよいやら……わたし達親子三人、その言葉もないくらゐでございます。ご親切のお蔭で、わたしの難病も、ごらんの通り快くなりましたし、子供達も見違えるばかりに肥りまして、以前のやうに泣顔一つ見せたことがございません。方丈さまは、命の恩人でございます。あの時御親切に、かうしてわたし達をお世話下さらなかつたら、今ごろはもう生きては居られなかつたでございませう……」

と、涙に咽びつゝ語る聲音をきいた源吉は、ギョツとしてしまつた。なんと、母つねの聲と寸分違はないのだ。

(阿母?)と、ドキンと胸を衝かれた時、「まアさうく言ひなさんな——世話をすると云つても見る通りの貧乏寺、慈養になるやうな喰物もなしな……それでもお前さんの病氣がよくなつたのはひとへに源吉の孝心を佛が愛でくれた賜物ぢやらう、はゝゝ」

「ととんでもない方丈さま、源吉の奴は、あらうことか、尊い如来様を盗み出さうとした痴れ者——あんな心の曲つた奴を、わたしが産んだかと思ふと、方丈さまには、顔……顔向けも出来ない程でございます。——御牢から出て参りましたら、きつときつと懲らしめまして、方丈様にお詫びをさせます考へ……」

腸を絞るやうな聲だ。

「いや、おつねさん、さうでない。あの源吉は、立派な奴ぢや——盗みを働いたのも、みんなあんたの病氣を癒したいばかり……わしもあ

の時、その孝心に愛でて、罪をゆるしてやらうと思はぬではなかつたが、考へてみれば、生じ不惑をかけては、源吉の身の爲にならずと悟つて、心を鬼にして役人に渡してしまふたのぢや。——今頃は辛い苦役に、大方わしを恨んでゐるぢやらう。了石の聲もふるへてゐる。

「だが、結局それがいいのぢや。いくら恨んでも、悪事の報ひは必ずあるものと、悟らせるのが一番いいのぢや。そしておのれの罪を身で以つて贖つたら、以後は眞人間になれるぢやらう。——その代りわしは、あんた達を源吉に代つて世話しやうと心を定めた……」

「あつ」源吉は心がふるえてきた。知らなかつたのだ、了石のさうした深い心を。

「方丈さん、ゆ、ゆるしてツ」

と轉げるやうにその居間に飛び込むと、病床に起き直つてゐる母と對して、腕を組んでゐる了石の前に、ビタリと兩手を突いた。

「存、存分にして下さい——わ、わたしは方丈さんを恨んで、その怨みを今夜晴らしにきた愚者……罰當りだ、悪黨だどうか方丈さん、思ふまま懲らして下さいッ」慚愧と感激に、泪がとめどなく迷つた。

了石も流石にギョツとしたが、直ぐに事情をさると、

「はゝゝ、源吉か——何も言ふな。分つてさへくれれば、それでいいのぢや——わしは唯僧としての務めを果たしたばかりぢやからのう」

街の火事騒ぎをよそに、和やかな静寂が、その居間に立ち留めてきた。火焰をうつした夜空の何れからか八つの鐘の音が流れてきた……



話 童

マヤ夫人のお夢

大谷 隆雄
野水 昌子 畫

御存知のやうにお釋迦さまの御誕生を
お祝ひするのが、花祭りです。そのお
誕生の有様を描いた美しい物語り。

今から二千五百年程も前印度に迦毘羅國と
いふ大そう豊かにめぐまれた國がありました
その國の王様を淨飯大王様と申し上げ、大
そうなさけ深い御方で、いつも人民のことば
かり御心配になり、其の上まつりごとを御聞
みになつたので、人民達もこれを大變有難が
つて親の如くおしたひ申し、國中にはそのた
めに何のいさかひも無く、それはく平和に
治つて居りました。王妃さまを摩耶夫人様と
申し上げ、美しく御氣だてのやさしいお方で

王様との間もむつまじく、人のうらやむ程の
御仲でした。が、御二方の間に王子様のないこ
とは何より淋しいことでした。王様もお妃さ
まもこれをお嘆きになつてどうにかして世つ
ぎの王子がほしいものと、つね々々思つてお
在でになりました。

その迦毘羅城の都には、毎年きまつて七日
間にわたつて大きなお祭りがありました。
その間、人民達は仕事を休んで、老いた人
も若いものも、女も男も奇麗に着飾つて、お
祭りを都中總出でお祝ひ致しました。この時
淨飯大王様も摩耶夫人様もこの賑かなお祭り
に共々お出かけに成り人々の立派な催物を
御覽に成つたり、又王様自からも色々なこと
をお指圖なさつたりいたしました。

この時も摩耶夫人は貧しい人々に施しものをなさつて、徳の高いお坊さまをお城に招いて、身體を清め、尊い御儀式をお受けになるとそのまゝ蘭麝の香をたきこめたお部屋に入り、やすらかに眠りにつかれました。

その夜摩耶夫人は大そう不思議な夢をごらんになりました。

遠い大空の向ふに小さな紫の雲が一つふうわり浮んだと思ふと、見る見るうちに摩耶夫人のそばに近づいて参りました。そしてその雲の中から、四人の美しい天人があらはれて、摩耶夫人を軽くお抱き申上げると、また雲にのつて、どん／＼大空に上つて行きました。お妃が雲の上から下を御覧になると、お城も都も皆な遠く、次第々々に小さくなつて行き、やがて見えなくなつてしまひました。

間もなく雲が、ある香りの高い、非常に美しい花園まで来ると、四人の天人はお妃さま

を其の花園にうつしてから、どこともなく飛んで行つてしまひました。

その花園は名もわからない、見たこともな



いやうな花が、色とり／＼に咲き亂れ、繁れる樹の間から涼しい風がそよ／＼とやわらかくお妃さまの御顔をなでて行きます。そしてはるか彼方には陽の光りに照されて、静かな

湖もなごやかに照り輝いてゐました。そこへ先きの四人の天人が再びあらはれてお妃さまを湖におつれ申し、その清き水で夫人のお體を洗ひ清め、天女の一人が捧げてゐた金波羅花で作つた花衣をお着せ、手には白い蓮花を持たせられました。

それから又紫の雲にのせられるとまた／＼く間に、お妃さまは、どんなに立派な迦毘羅城でも、とても及びもつかない程、何から何まですつかり黄金造りの目のさめるやうな御殿の中にみちびかれました。そして、今までまだ一度も使つたこともない立派な数物の上にお坐りになると、どこから現れたのか、一頭の體中光り輝く、そして六本のきばを持つた眞白な大きい象が摩耶夫人の前に来て、夫人のお持ちになつた白い蓮花を、長い鼻でまねきました。

するとどうでせう。さしもの、大きかつた象が急に仔犬の様に小さくなつたかと思ふとお妃さまの右の袖から脇の下に入つて、その



まゝお腹の中に入りこんでしまひました。
ハツとお驚きになつたお妃さまは我にかへ
つてお目さめになつた時は、もうキラ／＼輝
く陽の光が、お城一杯をつゝんでゐました。

その朝、お妃さまは今迄見たことのない
この不思議な夢のお話を、王様に申し上
げますと王様は
『何といふ不思議な夢だ。しかし、これ
には何か深いわけがあるかも知れない。
一つ婆羅門の博士でも呼んで夢を判じ占
つて貰ふことにしやう。』と云つて、早速
國で名高い婆羅門の博士を、お城に呼び
出しになりました。
さすがの博士も、しばらくの間は、頭
をたれて考へてゐました。やつと判じつ
いたものか、王様の前に進みよつて
『私達が占つて考へますのに、これは誠
にお目出度いきざしでございます。お喜
び下さい。白い象が、右の脇の下から、
お腹に入つたのは、とりもなほさず、王
子様のお生れになるしるしで御座います
この御方は何事もなく家のうちで御生長にな
れば、印度で誰も及ぶものゝない、大王様と
なられませう。もし、王位をすてゝ出家なさ
れば、世界中の人達を救ふ、尊いみ佛様とな

られませう。だが、どちらにしても、たゞの
お方ではございませぬ。』
と聲を揃へて申上げました。
王様はもちろんのこと、お妃さまも、其處
に並居る人々も、大へんお喜びでございまし
た。

なる程婆羅門の博士の占つたとほり、それ
から間もなく、王子様がお生れさうに成りま
した。ところが、その頃、印度の國のなら
はしでは、身分の高い人は、お里へ歸へつて
お産をする、と云ふならはしになつてゐたも
のですから、摩耶夫人も、生み月が近くなる
と、王様から暫らくお暇をいたゞいて、お里
へおかへりになる事になりました。

お妃さまは金覆輪のみ輿にのられ、澤山の
お伴をおつれになつて、迦毘羅城からお里へ
何日かの旅をなさる事になりました。

其のお妃さまの行列は立派で、見る人を驚
かせる程でした。

そして幾日目かに、行列は藍毘尼園といふ

花園に通りかゝりました。数しれない、色々の花が咲き亂れ、その間を、名も知れぬ小鳥がたのしさに遊び戯れ、園の中には冷たい泉がわき出で、その水のあふれたのが、小さい流れをつくつてサラ／＼と奇麗に流れてゐます。

お妃さまはこの花園までお出でに成り、美しい有様を御覽に成つて、一休みすることになりました。

ちやうど園には今アショーカ樹の花が、きわだつて美しく咲き亂れてゐるのを御らんになり

「この美しい花を、里へのお土産にしやう。」

と右の手をあげて、そのアショーカ樹の花を一枝手折らうとなされた時、さつと一しきり涼しい風が吹いて来て、花は自からお妃さまのお徳の尊いのになびいたものゝやうに夫人の前へ垂れさがり、夫人をアショーカの花がきれいにきれいに包んでしまひました。

其の時、木の下に在る泉にはかに涌き出で、そこにつぼみを持つた七本の蓮華がバツ

と美しく咲きました。

たのしや よろこばしや ありがたや

あゝめでたや、めでたやな。

と小鳥が一段と聲を張りあげて歌ひ出し、

あたりには何とも言へない、いゝ香りがして

天からは美妙な音楽がひゞいて來ました。

と思ふと其の時、摩耶夫人は玉の如き立派な王子さまをお生みになりました。不思議な

ことには、王子さまは、お生れになるとすぐ

お妃さまのまはりを七足お歩きになつて、まだ唯れも教へもしない人の言葉で

「私は世界で最も尊い王である」と申されま

すと、美しい音楽が一段と空の方からなりひ

びき、たくさんの天女が、王子さまの前に降りて來ると、其のまはりを踊りながら、聲を揃へて唄ひました。泉は冷たい水を涌かせて

けがれを清め、ナンダとウバナナンダといふ龍王が大空から、一つは温かいお湯を、一つは

冷たい水で、王子さまのお體へ、そゝぎました。ヒラ／＼と花は飛び、あか／＼と光り輝

くその時、この世には、盲目も眼が開き、い

ざりは足が立ち、病人はすこやかになり、悪人はみんな善人になりました。

「これは不思議なことだ。」と世界中の人達は皆驚き、そして、喜びに満ちあふれました。

わけでも王子さまの御生誕と聞いたカピラ

城の人民達は、この國の榮を、自分たちの幸福を祝ふ萬歳の聲が國中へひゞきわたりました。

淨飯大王さまのお喜びは申すまでもありません、大臣や、侍女は、矢の様に飛んで國へお迎へに參りました。

この王子さまが、後にお釋迦様と成られた尊い御方なのです。そしてこの日が四月の八日でした。今でも四月八日は花まつりと申してお釋迦さまの御生誕を世界中の方々がにぎやかなお祝ひいたします。

この王子さまが、後にお釋迦様と成られた尊い御方なのです。そしてこの日が四月の八日でした。今でも四月八日は花まつりと申してお釋迦さまの御生誕を世界中の方々がにぎやかなお祝ひいたします。



俳壇

大田耳動子



青森 工藤 汀醉

評 廣目屋の來て憩ひをり冬の驛

評 廣目屋はチンドン屋の事である。チンドン屋では、あまりに俗っぽいので廣目屋としたのであらう。斯うした表現の苦心は句を上品にする。

のんびりしてゐるところ、田舎町の關の面目が躍如としてゐる。暖いストーブにでも、あたつてゐる事か。

長野 久保田 穰

街燈に粉雪かゝる夜明かな

評 見た儘の光景に對して寧ろ平凡に近い表現ではあるが清淨たる感をいだかせ、深みのある句である。此の粉雪は淡く地上にも降つてゐる事は想像出来る。

姫路 内海 眞瑞

つくばひに猫のなめゐる氷かな

評 一スケッチである。咽喉の乾いた猫が手水鉢の水を飲みこみやつて來たところ、氷が張つてゐて、どうにもならない。氷も水のうちだと思つたかどうか、其の上をなめてゐると云つた光景である。例のザラ／＼した猫舌で氷の上をクラ／＼なめてゐる音などが想像させられる。

石堂 柑 山

麗かに野燒の灰の降り來る

會津 齊藤 華舟

少しづゝのびてゆく日の夕明り

奈良縣 瀧村 雲巖

朝夕の曇りを柳の景色かな

東京 北山 白雨

不二の浮く横須賀線の麥青む

禮文島 長尾 了圓

鳥寺は荒れたるまゝに十夜かな

樺太 庄司 シマ

寒行の見えかくれして灯行く

本郷區 梅澤 某

顔せに笑みのあふるゝ離かな

和歌山 白枝 遊路子

たれさがる枝に泡だち春の水

京都 松尾 慈海

漣やときわぎくらき枯木立

大磯 豊田天恵女

雪間／＼に小れんげのまる葉かな

和歌山 矢名

引く波について歩きぬ寒鴉

京都 上羽 良一

若水のうすみどりなる清さかな

大阪 小山 文二

雨ひと日ラヂオの都踊かな

鹿兒島 藤崎 耕我

誠心は誰れにもあるか冬炬燵

下關 關野 公孫

木枯の闇に狂へる波止場かな

東京市 寶城正錢寺

春の星魚孕む夜の湖に映ゆ

三重縣 岩田 諦眞

三祖忌を迎へて笑ふ東山

山口縣 長岡 見地

鶏の餌を伺ふ如し寒雀

山口縣 柳居 宏俊

デパートに温室の花買ふ人待つと

愛媛縣 千葉 長行

梅折ればこゝより春の匂ふかな

東京 三野輪河雪

あたゝかき窓より遠く富士青し

三重縣 税 岩子

梅林はなれて紅梅一木あり

北海道 竹岡 全昇

紅梅のこぼれ咲きたる小村かな

滋賀 豊田 綾子

路の盡いつまでも手の香ひけり

東京 長谷川夏彦

海苔やけば草の色してきたりけり

同 須田 曉鐘

子雷の降の聞ゆる程となり

宮城 佐藤 耕石

屋根をずる雪に大いなる氷柱かせ

同 豊歳 倭文

七草を摘みたる笹の響さかな

同 五島白陵子

太郎次郎久留米餅の春着かな

兵庫 楠田 英子

何事もなくて元日よき日かな

弘前 矢川 テイ

追羽子をさけて酔ひたる禮者かな

神奈川 永田石簡子

灰よせて何やら煙る火鉢かな

同 前田 光石

談笑の臉に勿ねし炭火かな

空

——日本人の生活から——

眞野 正 順



床の間

先年、來朝した、獨逸の有名な建築學者ブルノー、タウトは、近頃の外國人に珍らしく、鋭い眼をもつて、日本の固有の文化を深く洞察して行つた人として、評價されてゐますが、先日、ふとした機會から、この「床の間」論を読んで非常に面白く感じました。

そこには、かういふ事が書いてあります。

日本の座敷と、西洋の室内とは、まるきし違つた氣持が流れてゐる。西洋人の室内に入つて見ると、まづ目につくのは、そこらにごたくと色々な物が並べてあることで、壁と云はず

窓と云はず、あらゆる空間に、油繪だの、彫の角だの、皿だの布だの、いろ／＼なものが、ほとんど隙間もなく、一杯ごたごた並べてある。ちやうど、倉庫にでも入つたやうな感じで、その中に、主人公は、さも満足らしく、どつかと腰下して、パイプからゆらく、紫の煙などをあげて微笑してゐる。

このやうに、雑多に色々なものが飾りつけてあることは、やがて、それだけ、この家の主人公の趣味教養の豊かなことを、そのまゝ現はしてゐるもので、そこに訪ねてくる人は、室に入つてあたりを見廻しただけで、主人の教養の程度や、その家の歴史由緒の遠さなどを、一目でさとり事ができる。謂はゞ、その人の内部にひそんでゐるありたけのものが、形をとつて、そ

の室内に展開してゐる。

ところが、日本人の座敷となると、それと反対に、そこらに何物もない。たゞ自然的な畳と障子と土壁とだけで區切られた一間の空間の中に清楚な空氣がさえ／＼と流れてゐるだけである。そうして室の一隅に作られた「床の間」と稱する凹處の壁に一幅の軸がかけられ、その前に置かれた一瓶の花壺から、その時々季節の色が、鮮かに匂ひこぼれてゐるばかり、いかにももの寂しく靜かである。

これは、どうした事であらうか。この家の主人は趣味が單調なのだらうか、色々な裝飾品の類を持つてゐないのだらうか。と思ふと、そうでない。主人は趣味も廣く、さまざまな貴重な美術品を數多く所持してゐる。

しかし、それらは悉く土蔵や押入の奥深くに藏ひこまれ、たゞその中の一つ二つのみが、時々えらび代へられて、かうして飾られてゐるだけである。

そこで、タウトはかう言つてゐる。

このやうに簡素に何の飾もしなく、しかし目に一塵もとどめぬやうな淨らかな、「空」に室内をしておくことに、日本の座敷の深い意味がこもつてゐる。この何物も置かぬ空白な座敷はや

がて、あの「床の間」の裝飾をほんとうに室全體に生かしてくる微妙な手段である。見よ。一たび、床の間に春の趣きを傳える軸物がかけられ、壺に鮮かな花が盛られると、今迄空白であつた室内全部は、たちまち、霞郁たる春の空氣に暖かく満たされてしまふ。更に、それを除いて、物寂びた晩秋の姿を置き代へれば、全室は、たちまち、蕭條たる秋の趣に變つてゆく。室はたゞ、床の飾りの趣につれて、きわもなく千變萬化してゆくのである。

日本座敷の飾りなき空白は、たゞの空白ではない。それは床の間のあらゆる姿をそのまゝ受け容れ、それを室一杯に生かしてゆくための大切な「空」なのである。

それゆえ、家の主人は、季節と共に移りゆく心の動きにつれ或は、招待する客の趣好につれ、數多く蓄えてある美術品の中から一品二品を注意深く選んで、それを床の間にかざりつける。飾りつければ座敷中は、たちまち、其趣を含んだ空氣によつて、満たされ、溢れのぼつてくるのである。

これに較べれば、あの歐米人の室内は、一見、いかにも豊富なやうで、さまざまの物が透間もなく、飾り立てられてあるが、實は、かへつて、單調なものであつて、人は、一度二度とつく

りと眺めてしまへば、むしろ退屈を感じ出すであらう。その中に何等の「動き」がないからである。然るに日本の装飾は、一見單純なやうに見えるが、その中には、總ゆるものを受け容れ生かし輝かして留ることのない、汲めどもつきぬ無限性をもつてゐる。

こゝにまた、あの日本人の勝れたる、特性が閃めいてゐると言へやうか。流るゝ水のごとく、總ゆるものに應和し、諧調しつつ、それを吸収して、すく／＼と伸びてゆく日本人の流動やむことのない自在な特性が閃めいてゐると言へやうか。

それならばこのやうに總ゆるものに應じて千變萬化して行くことの出来るのは、何に依てゝあらうか。

それは、はじめに、室内に眼に一塵も留めぬ清白な「空しさ」があるからである。「空」しくなつてゐればこそそれは總ゆるものを受容れ、そのものに成り切つて、それを生かしてゆく事が出来る。日本人の生活の深い意味は、この「空」の中に横はつてゐる。

x

x

x

この事を讀みながら、私の頬に、おのずからなる微笑が、靜かに浮んでくるのを禁じ得ませんでした。

『日本人の生活を本當に生かしてゐるものは、「空」である』
これは、久しく、私共日本人から忘れられてゐた大切な眞理です。

「空しく」といへば、何か空洞な手頼りない感じを私達に與へる。「空に生きよ。」と聽かされゝば、何もかも淋しく諦めてしまふ消極主義にでも入つて行くかのやうに響く。それ故、現今の人達は、進んで、この言葉の深い意味を理解しようともせず何時か背を向けしまつてゐるのですが、實を云へば、この「空」こそ、眞に生きるためには、缺く事の出来ぬ大切な心構えであつたのです。

「人は、本當に生きるためには、必ず、己を空しくせねばならぬ。「空」の世界に入つてこねば、本當の生命は味はれぬ。」この眞理は佛陀がはじめて説き出したものです。二千五百年にわたる遠い佛教の歴史は、この眞理に更に磨きに磨きをかけて來た長い年月であつたと云ふ事ができまじやう。この教は、我國に入つて、奇しくも我が俊秀なる民族性と美しい調和を遂げました。いま世界に誇る我が民族の無比なる資質も、實は、この「空」といふ眞理の砥石の上にかゝつて、はじめて輝かしく磨き出されて來たものなのです。

明治以來、しばらく歐風の生活に馴染み過ぎてしまつた我國の人士は、多く、この事を忘れ果てゐます。然し、忘れ果ててもこの眞理はわれらが祖先の久しい努力によつて私共の生活の中に深く織込まれて、日本人特有の生活を築きあげるための大切な要石になつてゐるのです。

この事を知るために、もう少し私達の日常生活を顧みて見ましよう。それには、その「床の間」にかゝつてゐる「日本畫」を見るのが好いでしやう。

日本畫

私共が、倦かず楽しんでゐる日本畫には、洋畫とはまるきし違つたところがあります。もちろん、繪具材料や筆觸などの、ちがひもありますが、一番目に立つ差異は、日本畫には、畫面に、何にも描いてない眞白な空白が存してゐる事でしやう。

西洋の畫には、何にも描いてない空白なぞ何處にもありません。畫面全體は限なく繪具で塗りつぶされて、一寸の餘白も残つてゐない。丁度モザイクのやうに様々な色がぎつしりと詰まつて、色々な風物の姿を現はしてゐる。考へて見ると、それは私共が、我が周囲に見る事物をそのまゝ寫し出したものです。

目をあげて、四圍を見廻せば、この世界の自然の中には、眞白な空白などは何處にも無い。空を見ても、地を見ても、世界はいたるところ、必ず、何等の色彩や形象があつて、それが一杯につまつてゐる。この姿をさながら寫し出そうとしたのが洋畫です。

ところが、日本畫になると、まるきし違ふ。たちまち筆を躍らせて紙面に描き出された一塊の墨と数莖の蘆は、如何にもその雄渾な筆致に生き々々とした姿を現はしてゐるが、たゞそれだけで、あとは生地そのままの空白です。濃艶な花卉にとまる美しい春鳥。そこには、實に細かい寫實の妙が極めてあるが、たゞそれだけで、あとはやはり空白です。こんな、蘆の葉だけ、花鳥だけぼつねんと宙に浮いたやうな姿は、實際の自然の中には何處にだつてありはし無い。

これは、どうした事か。

それ故、西洋人の眼には、日本畫はいつも理解が困難です。彼等の愛好する日本畫と云へば、きまつて錦繪です。錦繪は兎にも角にもそこにあるものを悉く畫面全體に描き入れて餘白を残してゐないからです。

それなら、こんな不自然な餘白を残すやうな日本畫は畫とし

て不完全なものだらうか。

かう言つたら、恐らく日本畫家はすこし苦笑しながら答へるでしやう。「その餘白こそ私達の畫の大切な生命なのだ」と。

大綱みに喩えて言へば、洋畫は譬へば寫眞機のレンズの様な心持でしやう。その目に映つてくるものは、悉く井然に寫しとつて終はねば氣が濟まない。これに反して、日本畫の心持はそのやうな器械的なものでなくて、むしろこの人間の生きた肉眼にたとへられる。私共が、自然の風物を見てゐると、はじめは其處にあるすべての景色が残りなく寫眞機のやうに眼に映つてくるが、やがて、其中の最も心ひかれるものに眼を留め、ちつと思ひを凝らしてゐると、いつか、あたりの風景は、それが確かに目に見えてゐながら、いつか其姿もあるかなしか、鹽氣となり、たゞ目ざす中心のものだけ、くつきりと益々はつきりと眼に射つていく。

この心持を現はしたものが日本畫でしやう。日本畫は、たゞちに畫の目標とするものにとび込んで、それに専注してゆく。

一瓶の花でも、それを眞に味ふには、その周囲のものは邪魔である。あらゆる邪魔物を去つて、たゞそのみに精神を集注して、ちつと目を凝らした時、はじめて、その瓶花に藏る深い

美しさは寂かににじみ出てくる。

日本畫が畫面にひろい空白を残すのは、そこに描かれたものをその微細に涉つて眞に生かしてくる爲からです。

自然の一章一本は、その表に簡素な姿を見せながら、その内に汲めども盡きぬ深い趣を湛えております。その描いて描きつくせぬ深い美しさは、たゞ觀る者の深い寂かな眼指の底にのみほのかに映つてくる。

かゝるものは、たゞ自然の外形のみを混りなく寫とることにのみ専念する洋畫の中には現はれてこない。それはたゞ、心を亂さず、その物にちつと心を専注する日本畫のみに許された世界です。

かく考へて來れば、日本畫の餘白は、やがて描寫す自然の奥底深く透徹してゆくための最妙の手段であつた事が知れる。

わが國の繪畫もまた「空」によつて、その特質を發揮してゐるのです。

× × ×

(この話は、もう少し續けさせて置きます)

談 相 仰 信

……中村辨康師擔當……

(本欄への質問はハガキに住所氏名御名記の上信仰相談係宛のこと紙上匿名は可)

馮きものとは何か

問

私の地方に於ては、犬神が悪いたとか、狐が惡いたとか、食物をアレが見たから變になつたとか、兎角中老以上の者が申します。私は信じませんけれ共一體惡かれた人と、惡くと噂する人にはどうしてその間違ひを説明したなれば宜敷くありませんか、御教示下さい。

答

(防府市 先村利吉) 「惡きもの」病と云ふのは變態的な心理で、つまり二重人格になつた事です。暗示に依て人格が分裂した一種の精神病ですから、専門家に診て貰つて治療を受ける方がよいでせう。普通の人では癒し

切れまいと存じます。やはり催眠術的な暗示法とか或は威嚇法とか夫夫病症を見て術を施さねばならぬからです。品川御殿山の中村古峽さんは此道の權威者だとの事です。私の外父は元旗本でしたが、大身の槍をしごいて狐憑きを落してやつた事があつたさうですが、之などは威嚇法に依つたもので武道に自信があつたからです。なまじつかな調誠などでは中々なほらないでせう。尤も平素非常に尊敬して居る人なら効果はありませうが、それにしても理屈で押して行くやうなやり方では駄目です。澤庵禪師が柳生

十兵衛の慢心を癒したと云ふやうな方法なども一つの方法でせう。

また中老の人がさう云ふ事を信じて居てよく雑談に狐憑きの話などして、自然に幼い子供達に暗示を與へる事があります。之は百害あつて一利もない事です。さう云ふ人達には變態心理から來た病的現象であることをよく説明してや

三誓偈と四誓偈

問

我建超世願の偈文を或は三誓偈と申して居ります。或は四誓偈と申し、(誓不成正覺が三遍なる故に)解釋法は何處で異つて居るのでせうか。(滋賀縣 道人 生)

答

「誓」と云ふ文字の數から云へば(第三卷新年

つて欲しいものです。また宗教的には御祈禱などで癒す事は出來ますが、教養の低い女祈禱者の神おろしなどに於けるのは却て迷信を増長させる譯で、其人の爲にも社會の爲にもよくありません。それよりも靜かに三日なり五日なり一週間なり一緒に念佛してやる方がより効果的です。つまりは精神的な病氣だからです。

號四誓偈講義參照) 三誓であり内容から云へば四誓と一請とであります。こんな事に何もこだわらなくともよいと存じますが傳習の上で或は三誓或は四誓と云つて居る譯です。解釋法は古來色々科段を分けて居ます。慈遠と云ふ人は十一偈を二つに分けて前十偈を立誓、後一偈を

信 仰 相 談

請證と云つて居り、吉藏と云ふ人は三つに分けて、初の三行を正誓、次の七行を誓後更願、終の一行を誓願と云つて居り、元曉といふ人は更にもつと細かく分けて委しく解釋して居りますが、委しい事は専門的になりますから御遠慮させて頂きます。要は十一行の偈文を三七一と分けて、前三行は四十八願を受けた誓であり、中の七行はそれに附随したものと見るか、或は前の三行も夫々獨立した内容を持つて居るが、それと同様に中の七行も佛の内容としての特性を擧げて居るから、やはり獨立した誓願であると見るかの相違に過ぎまいと存じます。読み方などでも、三誓偈を主張する方には、中の七偈に「らん」とか「せん」と云ふ願望の意味の言葉を十一個所もつけて居りますが、之だと形式上

では前の三偈に合せて十四誓とでも云はねばならなくなりませう。尤も原文は何うなつて居るのかそれは存じません。

本願力はどうか 現はれる

問

淨土二月號六十八頁十行目「之の力に依て一切の諸現象も生み出され動かされつゝある」宇宙意志としての本願力はわかりますけれども萬象

答

御尋ねの要點は二つのやうですね。一つは「萬象が如何に動きつゝあるか」と云ふこと。二は「限りなく顯はれつゝある偽悪醜の中に本願力が何う現はれて居るか」と云ふこと。

一の問題は、萬象それ自體常



ノーシンのいいところは服む……スツと痛みが消える同時に、頭の疲れを恢復する……この二つです。而かも胃腸等には勿論、安全で、連用すれば頭腦ばかりか、心臓迄も強補する効果あり。これでこそ完成せる模範的頭腦薬と稱せられる所以！

頭の痛みと疲れに



三錢・五錢・一圓・二圓

に縁起しつゝ進展して居るので、現に目前に貴君が御覽になつて居るやうに動きつゝあるのであつて、何うもかうもありません。目前の事實です。然し其目前の事實を第三者の立場に立つて「置かれたるもの」として見ず、自分の身に引き比べて宗教的信仰的に如來の本願力として仰いで行くとき、向上的方面を如來の御慈悲として感謝し、向下的方面を自分の「惑ひ」の致

信 仰 相 談

すところとして反省して行きた
いと存じます。

隨て第二の問題の「偽悪醜」
は其本願力に隨順せず本願力
に逆流するところに現はれつ
つあるものと云ふ宗教的な見方
をするのが、信仰人の本當の味
ひ方でありますから、本當の信
仰人は自他の偽悪醜を一切合切
我が身の至らざるよりして起り
しものと懺悔して、多少なりと
も眞善美に向はうと努力する
筈です。して見れば其人に取つ
て自他一切の偽悪醜は、直ちに
如來の慈悲として感激の材料と
なり刺戟の材料となつて居る譯
で、つまり平面的な「置かれた
る」偽悪醜と見ずに、自分自身
の向上の一路を辿る上に示さ
れたるものと見る、云ひ換へま
すれば道徳上の批判論でなし
に、如何なる現象をも我が身
の信仰培養上の問題として自

分の上に味つて行くので、信仰
人としては之が本當の行き方
はないでせうか。議論ではあり
ません。少くともさうして行き
たいとお思ひにはなりません
か。

尙ほ基督教のことは私は存
じませんから、「同様か同様でな
いか」は御答が出来兼ねます。

回向はいらぬか

問

中陰中の御回向は至極
大切と承り候其時
に地獄へ行くか極樂へ生るゝか
どちらかきまるさうです。然る
上は七回忌十三回忌等はいら
ぬ様に考へられます如何に候
や。(奈良指月生)

答

回向と云ふことを貴
君のやうに功利的に
考へてよいでせうか。地獄に行
くか極樂に行くか私には判り
ませんが、少くとも信仰のない

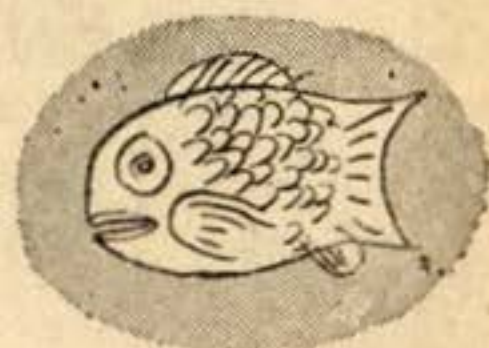
人は、平生の生活が殆んど
云つてよいくらゐ、食りや愛欲
などを中心にして居たのでせう
から、地獄的な苦果を受けて居
られるでせう。だとすれば少く
とも「反省」をして頂き少しで
も「覺醒」の方向へと展開して
頂くやう回向することが何う
して「いらぬ」でせうか、本當
を云へば年回の時ばかりでな
く毎日々々回向してもよいでは
ないでせうか。

また信仰が篤く極樂に生まれ
つゝある人に對しても、残され
たるものの務めとして、其菩提
(覺醒)の増進が望まれていい譯
で、骨肉の愛から云つても、そ
んな「もういらぬ」など云ふつめ
たい薄情な考へは起らない筈
です。況して菩提は「無上」で
あつて上が無いのですから、
「あれだけ覺醒したらもう中止
してもよからう」と云ふ打算的

なものでないとすれば、いやが
上にも向上をせらるゝやう回
向してよいではないでせうか。
戲論を云はずにもう少し眞剣
になつて考へて下さい。功利的
な考へは本當の信仰には大禁
物ですから。

山梨依田淨信氏へ

三月掛りを忌む風習に就て、
九州の江上氏から御知らせがあ
りましたから一寸申し上げます
それは、三月掛りと云ふのを
「身付き懸り」と云ふ語呂で、忌
むやうになつたのだと云ふ解
釋です。かうした例はよくあり
ます。例へば「人丸神社」を「火
止る」で火防の神様にしたり、
「人生る」で安産の神様にしたり
するのと同じ事で、語呂から來
た迷信が随分ありますから。或
はそんなことかも知れません。
御参考までに申し上げます。



通俗方丈記

佐藤春夫述

河の流れは常に絶える事がなく、しかも流れ行く河の水は移り變つて絶間がない。奔流に現はれる飛沫は一瞬も止る事がなく、現れるや直に消えてしまつて又新しく現れるのである。世の中の人々の運命や、人々の住家の移り變りの激しい事等は丁度河の流れにも譬へられ、又奔流に現はれては消えさる飛沫の様に極めてはかないものである。壯麗を極めた花の都の中にぎつしりと立ち並んでゐる家々は各々の美しく高い豊をお互に競争し合つてゐる。これ等の色々な人々の住家は何時の時代にもあるもので決して絶へるものではないのであるが、さてかういふ貴賤様々な人々の住家の中に不變のものを見出すと云ふ事は出来るものではなく、昔の儘に現在までも續いてゐると云ふ住家は殆んどなく、極めて稀に昔の美しさのある物を發見するのが頗る難しいことなのである。この邊に美しい立派な住家があつたのだと見て見るともうその家は去年焼け失せて無くなつてゐたりする。又こんな所にこんな立派な住家は無かつたのと思つて見ると前の貧しい家は焼け失せて現在ではこれほどの立派な住家になつてゐたりするものである。この様に昔お金持であつて立派な美しい住家に住んでゐた人が今は見る陰もなく落ちぶれて昔の住家に比ぶれば堀立小屋同様の住家に住んでゐたりする。こんな運命が人々の歩まねばならないものなのである。

昔からの知り合ひは居ないものかと見て見るとそうした人は中々に見付ける事が出来なくて、所も昔の儘の所であるのに、又そこに住んでゐる人々も昔の様に多數の人々が住んでゐるに拘らず、十人

笑話



父「おい太郎、パンの皮を残しちゃいけないよ……」

太郎「お父さんはパンの皮好きだつたの」

父「勿論さ」

太郎「ちや、これ食べてよ、ね。お父さんに上げるから。」

末恐ろしい

子供、學校から歸つて來ていきなり「お母さん、ぼくはお母さんに取つてどの位価値があるの？」

「まあ、いきなり、何をいふのそれは世界中の寶よりも坊の方が尊いわ。」

の中僅に二三人しか見出す事が出来ない有様であつて、眞に人々の歩むべき運命の路のあまりにも變轉極まりないのを見ると感動に堪えないものがある。

人間のかういふ運命、朝に生れては夕に死して行かなくてはならない果敢ない運命、變轉極まりない運命、かういふ事を深く考へて見ると全く、結んでは直に消へ、消へては又結ぶ水流の泡沫の如きものではないかと思つたりする。奔流に結び且つ消ゆる飛沫の運命、それが證する所人々の歩むべき運命なのである。

一體多くの人々がこの世に生れ出て來るのであるが、これらの人々は何處から來たものであらうか。そして又何處へ行つてしまふのであらうか。等と考へて見ると何處から來、何處へ行くかと云ふ問ひに對して答へ得るものは何處にも居るものではなく、何處から來て何處へ行くかは永遠に解くを得ない謎であつて人々はこの謎の中に生れ、さうして死して行くのである。水に浮ぶ泡が結び且つ消へる様に。

かく果敢なく、解くを得ない運命を歩まなくてはならない人々は又この世に於て何を樂しみ、何を苦しんで生きてゐるのであらうか。

泡の如くに消えなくてはならない儘かの人生の中でどんな仕事に面白味を見出し又どんな事で苦しんでゐるのかと多くの人々の答を求めたとすれば各種各様に答が出て決して一つのものにはならず、結局何を苦しみ、何を樂しんでゐるのか、また何を爲すべきか等と云ふ事も一つの永遠に解き得ない謎になつてしまふのである。

長い年月の間に火事の爲に、地震の爲、或ひは他の色んな變事の爲に、立派な美しい家がなくなつてしまつたり、又お金持の家が貧しくなつたり、貴い地位にあつた人が賤しい身分に落ちぶれたりする、こうした人々やその住家の移り變りの極まりない事は恰も朝顔の花に置く朝露と、その花との様なものである。花は露の住家である。露は朝顔の住人である。



『さう、ちや、すまないけれどぼくをカタにして五十錢貸して頂戴!』

春日遅々

久し振りに會つた二人の老人、久淵を叙した後、

『時に、孫がひとり、君の會社に勤めてゐる筈だが……』

『おゝ、その子じやつたよ。この間、祖父さんの葬式だと云つて社を休んだのは。』

流石は女房

美容院に來て美爪をしてもらつてゐる客、右手がすむと『右手だけで結構よ。左手は自分で出来るから、家へ歸つて自分で

露が先に地に落ちるか、花が先に萎んでしまふか、どちらにしても所詮は落ち、萎むべきものである。露が夕陽の頃まで残る事はなく、又朝顔とても同じ事、朝日が高く登れば萎むべき運命なのである。人々と人々の住家も所詮は朝顔に置く朝露と、朝顔の運命とを辿らねばならないものである。どちらが先に落ちぶれるか、それは解らないが所詮は落ちぶれるものなのである。

自分はこの世に生れて早くも四十年と云ふ長い年月を暮して来たのであるが、物心が付いてから色々に見聞して来た世間の事には全く不思議なものが数々あるのである。これらの多くの見聞したものを少し思ひ出して書いて見る事にし様。

昔の事ではつきりとは覚えてゐないのだが確か安元三年四月二十八日位であつたと思ふが、風の物すごく吹いてゐる日で、遂には大嵐となつた日の事である。京都の東南部の某の家から折り悪しく火が出たのである。何しろ強風の吹き荒ぶ時であつたからたまつたものではない。忽ちの中に火は東北の方へと燃へ擲がつて行つた。そして遂には朱雀門や大極殿、大學寮、民部省等の重要な建築を一夜の中に盡く灰塵としてしまつた。

この大火の火元の某家と云ふのは後の調査によると樋口富の小路にある住家で、病人の住んでゐたものであつた。燃え上つた火炎は折からの突風に煽ふられ煽ふられて、それこそ扇を扇げた様な型になつて末ひろがりに廣がつて行つた。火元から遠くにある家々は猛烈な煙の爲に全く圍まれてしまつて、人々は煙に咽び、呼吸すら全く自由には出来ない有様であつた。炎上してゐる家々の近くの道路は火炎が溢れ出て来る爲に人々の通行を全く阻止してしまつた。都の上空は炎と燃え上る炎の爲に夜は火の海の如く眞紅で、どれだけ強い火がどれだけ多くの家々を燃やさんとしてゐるかを物語つてゐた。又一方風は益々強くなるばかりで一向に静まりそうにもなく、その強風は時々火炎を遠い所へ吹き飛ばして又新しく火事を起して益々火事は廣がつて行くのであつた。

嵐と火事の眞只中に圍まれた京の人々は全く半狂亂でその爲す所を知らずと云ふ有様、皆もう生き



しますわ。」

云ふまでも無い

遊び廻つてゐる夫、それでも氣がとがめたものと見えて、遊び先から自宅へ電話を掛けた
『今日はどうしても抜けられない用事が出来て、他處へ廻つてゐるからね。』

『アラ、……で今どちらにいらつしやるの。』

『ウーム、今か、そ、それは……電話口サ。』

一理屈

省線電車の中で平氣で煙草を喫つてゐる男があるので、車掌

た心持もなく、唯々自然の成り行きにまかせて見てゐるより仕方がなかつた。何をする等と云ふ頭はまるで働かず、茫然自失、全く手の下し様になかつた。吹き付けて来る煙に巻き込まれた人は呼吸を止められてバツタリと倒れ、人事不省になり、又吹き付ける火災にその身を巻き込まれた人々は直にその場で貴い一命を奪はれてしまふ事も頻多であつた。こんな混亂と危険との間を幸にも辛うじてその生命を全ふして無事に脱出し得た人々でも自分の住家から大切な家財道具を持ち出す事はまるで不可能で、大切な家財が皆火災の爲に灰塵とされてしまふのを目の前に見てゐた。それでゐてどうする事も出来なかつたのである。この様にして焼け失せてしまつた諸々の家財、道具、或ひは寶物、その中には定めし先祖傳來、父祖傳來のものもあつたであらふに、それらのものの價はどれだけであつたか考へて見る事も出来ない程に莫大なものであつたらうと思はれるのである。

公卿の屋敷がこの度の大火の爲に十六と云ふ多數も焼け失せてしまつた程であるから、まして身分の賤しい素町人達の屋敷の焼け失せた數は數へる事も出来ない程に多くあつた事と思はれる。この大火は京の街の三分の一と云ふものを僅かの間の灰にしてまつたのである。

數多くの人々がこの大火の爲にその尊い生命までも落してゐるのである。これ等の中には青年少年で將來どれだけ偉大な仕事をやつたであらふと思はれる人々も尠くなかつたであらうに、惜しい事をしたものである。人間でさへこんな事になつたのであるから、まして畜生である馬や牛の焼死したものは數知れずあつた譯である。人間は本來、色んな愚にも付かない事をするものであるが、とり分けこん度の様に一朝にして總てを灰塵に歸すると云ふ様な危険性の多分にある都會の中にあつて、一朝にして灰となる運命も知らぬげに、自分の住家に、大層なお金を掛けて、あゝでもない、こうでもないといと色々苦心して、建てる事程間拔けた愚かしい事はないとしみじみと思ひ當つた。こうして苦勞して建てても一朝火災に見舞はれば直に灰塵となつてしまふのであるのに、全く建物にお金を掛けたり苦勞する程馬鹿らしい事はない。(つづく)

君が見兼ねて
『もしく。あそこに禁煙と書いてあるのが解りませんか。』
『なあに、構はんよ。』
となほも平氣な顔で煙草をふかしてゐる。
『では、貴君はあの注意書に従はんと云はれるのですな。』



『なにあの注意書に従はなければやいかんと云ふのかね。ちやあの横を見給へ、銀嶺は招く、スキ―を穿いて冬山へ』と書いてあるだらう。あれにも従はなけりやならんのかね。』

趣味の
傳説の
地藏尊物語

お地藏様の由來と傳説

葛 飾 山 人

(一) 六道能化の佛

地藏様はお釋迦様から未來惡生の凡夫達を救済する様に依囑された大菩薩である。

『一日一夜なりとも、我れの愛する衆生を惡道へ落す事勿れ』

と云はれて、晝夜の分ちなく、吾々を守つて居られる有難い御佛である。それだから地藏様は己れを分身して六道の辻々の行跡を見張つて居られるのである。その分身の地藏様に

は色々の御名がある。即ち『蓮華三昧經』に

『地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上各六道の地藏を檀林、寶藏、寶印、持地、除蓋障、日

光』等の名を以つて呼ばれる。又或る經では『延命、寶處、寶手、持地、寶印、堅固意』等の名を擧げてゐる。

此の名前の夫れ々相違して、且つギョチないのは、印度の原語から別の譯者が直譯したからである。

それ故地藏様の事を『六道能化の御佛』とも云ふ。道傍になぞ居られて、大變輕く扱はれてゐるが、之は大間違で、佛様の内でも大變大切な巾利きの佛様である。

(二) 道傍へ立てる事の可否

それ故昔から地藏様を道傍に置いて、『風雨之を犯し、鳥獸之を漬し、馬蹄の埃に



浴し、蕎麥の露に沈み玉ふは頗る不敬の至りにこそ」

と苦情を書き立てる人もある。實際、芝居に出て来られる處を見ても、辻斬追剝の場面にのみ引合に出され給ふて、『六道能化』の大稱號から云つては、地藏様を侮辱する事甚しいと云はねばならぬ。更に甚しいのは、悪太郎に顔を打たれて、齒ツ抜け地藏額無し地藏にすらなり玉ふ。又若い長松お鍋の出合にお堂を貸して、

『色觀音に取持ち地藏』

など諺にさへ云はれて如何にもお氣の毒を通り越してゐる。

だが、併し、反對者は

『いやとよ。之れこそは和光同塵、結縁利物、却つて地藏大菩薩の本懷であらう』

などとお爲ごかしを云ふものもあつて、今日でも地藏様は六道の辻に曝し物になつて居られる。

之れは印度支那何處もさうかと云ふに、決して左に非ず、日本丈けの風であつて、斯う云ふ事をするのは、中古西光法師と云ふ人が京都の栗田口等の七口の辻々に御像を安置し

奉つたのが始まりだと『倭訓の栞』の中に書いてある。

(三) 關の地藏の三度開眼

此の地藏の中では、近江の關の地藏が尤も名高い。關は今日の大津の町にあつて、有名な關寺のある處である。

此の地藏は凡そ足利の上葉に建立せられたものらしく、それは次の逸話でも想像出来る。但し之は『東海道名所記』に出てゐる。

頃は足利三四代將軍の頃である。此の邊りのものが集つて、茶吞話の揚句、

『のう、皆の衆、都の口々には六道能化の御佛が刻まれて立てゝ御座る。さらば逢坂の關の下にも此の御佛の御姿を安置して、村人は論無く、諸國諸人を守らせ給ふ様に祈らうではあるまいか？』

と云ふものがある。

『なかなか、それは又、近頃もつて、好い考へでおりやる。』

と云ふので、衆議一決、忽ち出來上つたのが三十二相揃つた立派な石地藏である。

『地藏も踏石も同じ石くれとは申し乍ら、斯

う出來上つた處は又一段と有難いものぢやな。したが開眼供養は誰れに頼うだら好いものであらうかな。』

『さうぢや、さうぢや、紙衣着るにも襟祝と云ふものが御座る。御佛を建てるのに開眼供養を外すわけには參らぬげな。それなら關寺の大和尚はどうぢや』

『減相な。高が道傍の石地藏に關寺の和尚が來てくれるかやい。代參りでも覺束ないわい。さりとて此の邊りの生臭坊主は頼む氣になら



ぬので、はて困つた」

「のう。太郎兵衛よ。昔より「所侍、旅

の僧」と云ふ諺もあつて、侍は、土着

の家の子郎従に限り、僧は行徳修行の托

鉢僧に限られてゐる様に云ひ噓してゐる。

されば此の地藏様の開眼には通りがりの

遍歴僧を頼うだら如何のものぢや」

「おゝそれそれ。その事ぢや」

と皆の賛成を得て、奎平と次郎作が關役人

然と山下の車作りの軒を借りて控へてゐ

ると、直に一人の旅僧がやつて來た。阿彌

陀笠に托鉢を持った貧乏僧だ。丁度新し

い地藏を見ると足を止めた。處が其の時、

關東へ行つた身内のものが今日歸るとて

其の坂迎へに來た京のものが同じくそこに

休んでゐてその旅僧を見ると、大變な事を

云出した。

「あれに渡らせらるゝは、紫野の大徳寺、

一休和尚にこそ。何處に行かせ玉ふやら

む。」

と車大工の店先で牛車を直すとして休んで

ゐた牛子が囁いたものである。そこで二人

の百姓が途方もない事を相談したが決心が

付かない。

「たとへ、紫野の大徳なりとも、あの様に



まじ。」

と云つては見るが、何分にも一休和尚では大

物過ぎる。それに彼が後小松天皇の御落胤

だと云ふ噂を知らぬものもない。

「さり乍ら、白龍魚服すれば漁師に得らる。

何事も合縁寄縁は御佛の教へぢや」

なぞと傍から岡持を提げた油賣がけしか

ける。

「左様々々。鬼も頼めば人を食はずと聞き

侍る。況して地藏尊の開眼に僧の斷る法

やある」

と銅を重ねて天秤で昇いだ銅賣が合槌を打

つ。

「さもそうづ、さもそうづ。犬も頼まるれ

ば木に登るとも云ひ侍るぞや」

と道六平六迄が尻を突つく。兎に角、一休

和尚に頼むには中々度胸が要る。だが、

後の方で、おどけ者が、

「坊さん頭にまくわ瓜、乗るか乗らぬかや

つて見よ」

と茶化すものがあるので、急に氣が輕くな

つて、遂に意を決したと覺しく、川流の瓢箪

の様な格好をして、二人の世話人が行つて恐

る／＼頼むと、案ずるよりは何とやら、いとも手輕に承諾してくれたものである。

そこで大喜びで、支度にかゝらうとする、それを抑へて、つか／＼と地藏の前に近寄つて行つた。承諾の手輕なもの道理、その開眼供養と云ふのが世にも手輕なものである。

『釋迦は過ぎ、彌勒は未だ出でぬ間の浮世にこそは地藏、目をあけ』

と大柄に怒鳴つたと思ふと、墨染の袖を翻へして、サツ／＼と關の霞の中へ消えて了つて、後には人々の呆氣に取られた口のみがあいてゐた。

勿論、一休の性質は誰れも好く知つてゐる。知つてゐるからこそ頼んだものの、さて一休の家風を自分に、こんな風に振舞はれては、何分にも堪能出来ない。

『いかに空布施とは云ひ乍ら、地藏菩薩への手前、餘りの仕打なれ。抑々、開眼供養と云へば、昔より一定一坐の威儀が供はつて存するぞかし。即ち供養の僧、先づ姿を整へて、然る可き經卷を誦し、供へ物をなして様々の所作をなすこそ習はしなれ。然るをあ

の僧の供養こそ心得ぬものの限りなれ。』
『よし、一走り追かけて、申し談ずべき節こそあれ』

と飛んでもない時分に、力み出すのを抑へて、
『措きね／＼。あの禪師の狂言口は缺け徳利の口の如く、出放題、流れ放題、到底我等の商も舌も立つものにあらじかし。』
と抑へるものもある。

『昔しより、只頼むは氏神様でも御不承知と云へば我等の方より文句を付く可き筋はなし。斷念むること好けれ』などと慰めるものもある。

『所詮、雲水旅僧などを頼み聞こえむとするが故に、斯かる仕儀にこそ成りつれ。それよりも在所の檀那寺の僧を招きてやり直すこそ好けれ。』

『如何にも。手を炙るは遠き大火よりも、近き小火とこそ云ふめれ』
と再び衆議一決、その翌日、地元の僧を招いて、開眼のやり直し』と云ふのをやつたのである。例の一定一坐の供養が行はれた事は勿論である。

『あゝ之れにて重荷を下した様に覺へ侍る』

と世話人共、安心して枕に付くと、さあ事だ！ 皆が、その晩恐ろしく地藏の幽霊にうなされたものである。幽霊の曰く、

『折角、紫野の大徳の供養をうけて、目あき地藏となりつるに、今又名もなき駄僧に開眼のやり直しを受けて、再び目くらとなつて了ひたり。此の目を元にして返す迄、やわか、汝等を赦す可しやわ』

と云ふ御託宣である。六道能化の地藏尊も茲では一個の眼病患者になつて掻き口説いたと云ふので、吃驚した世話人共、早速翌朝、乗物を昇いで紫野へ飛んで行つて、もう一度一休を引張つて來て、開眼のやり直しをしたと云ふ。

『地藏の顔も三度迄とは云へれど、之れは地藏の開眼三度迄と云ふ可し』
と誰れやらが笑つたとか笑はぬとか云ふ。

(四) 夜遊び地藏

之も地藏を盛んに道傍に立て始めた頃の話である。山科の道の傍に四ノ宮河原と云ふ所があつて、諸國商人の集る盛り場であると云ふ。

『どうも氏系圖を忘れて流れ来る商人の集る處は人の行ひ、淺間しく、いぶせき事のみ多ければ六道能化の地藏尊を建立せばや』と思つて、某が一生懸命で、石地藏を刻んで、開眼をする許りにして、氣の弛みの爲めに全く忘れて月日が流れた。處が三四年過ぎて、或る夜中の事である。

主人が獨り目が覺めてウツラ／＼してゐると、外に人の氣はひがする。



(夜盜女たらしの類か?)
と枕の上に息を凝してゐると、密かに『之れのうち。もうし。ちざう殿居るかや。早

聞陰な語
う云ふ言

音を持つてゐるが、正しくさ
語である。

く來よかし。早く來よかし』と囁くものがある。(はて、面妖な。我が家には治藏も次三も居らざるものを)

近代思想の先驅者
(ルツター・デカルト・ルーソー)
四六版三三二頁 價一圓三十錢 送料十錢

人間學とは何ぞや
(シエラーの人間學)
四六版三三〇頁 價一圓二十錢 送料十錢

東京神田神保町
同文館
振替東京一三五

『さてとよ。明夜は四の宮河原に地藏會のあれば、其方もし是非に參らせ玉へ』
『そは忝し。さはさり乍ら、吾等事、中々開眼供養を経ざれば、若し夜歩きを爲して、淵川に身を沈めなば、折角、主人が丹精籠めて刻みくれし菩提心にも悖るべう覺え侍るに、より、亦の地藏會を待ちなまし。』
『その儀は吾等事御手を引きて案内すべければ心に掛け玉ふな』
『いや／＼そのみに非じ、酒醉なぞに狼藉を受けて、衣の裾を缺きても、主人の歎きは如何ならむ。今宵丈けは曲げて許させ玉へ』
と、いともしほらしい返事である。

「此の家の主人の信心は龍釣瓶の尻抜信心ぞかし。いつの日、開眼を思ひ出してなしくる事か」

と吹き乍ら行つてしまつたらしい。

之れには強かに驚かされた主人、

「儲てきて、由々しき曲事をなしてけり誠に石佛が物を語るてふ昔よりの謠は我等を欺かじ。只の木佛石佛と思ひ居て、開眼を怠りしこそ悲しけれ。何卒地藏菩薩よ。許させ玉へ」

と、吹きつゝガバと撥ね起きて、押入へ飛込んで、菩薩の御像を引つ張り出して、三拜九拜、日頃の懈怠を謝つた後、齋戒して、明夜の地藏會に間に會ふ様に、一刀三禮の威儀を正して、開眼を行つたと云ふ。

之は『宇治拾遺物語』の第五卷にある話だが、何となく面白い神秘的な感じを與へる話である。

(五) 開眼供養とは

因に二つの物語共に「開眼」と云ふ事が主になつてゐる。之れを一寸説明するに「開眼」とは讀んで字の如く、彫像に眸を入れ

て、その眼を開く事である。之を「入眼」或は「點眼」「開明」などとも云ふ。之をやつて始めて、彫像に靈が入ると云ふわけになる。

だが、それから延いて、彫刻者が、此の眸を入れる時に或る種の式をする事をも「開眼」と云ふ。

之れに僧の祈念が伴ふ時に、之を「開眼供養」と云ふ。之れを略して「開眼」とも云ふ。之れは第二義である。前述の關の地藏の開眼は此の第二義であり、四の宮河原の地藏の開眼は第一義に近い。更に後世になると、僧の開眼供養が重んぜられて、彫刻師の方は輕んぜられて、

「開眼とは佛像を佛殿へ收める事也」とさへ云ふものがあるに至つてゐる。之も「開眼供養」と云へるかもしれぬが、それは飽く迄前者の入眼、點眼に伴つたものでなくてはならぬが、事實としては「入殿」を「開眼」と云ふ風もあつたらしい。

又別に「開眼」とは佛像の額に黄、或は赤の點を入れる事だと爲すものもある。之は轉義たるや勿論である。

直ぐ間に合ふ家庭重寶

壁の修繕に新聞紙

壁の隅が鼠に食ひ破られたりして一度崩れかゝると、紙などを貼つても崩が次第に大きくなるばかりです。さう云ふ時は新聞紙を細かに切り、長い間水につけて置くと、バルブのやうに溶けますから、それに糊を加へて煉り合はせて、その破れ目につめ込んで下さい。その上に紙を貼り壁と同じやうな色を塗ると體裁もよく、丈夫に簡単に壁の修繕が出来ます。

固つた灰の使ひ方

火鉢や爐を掃除した後に出る灰の固りは相當多いものです。これを取つて置いて入口などのぬかるみへ敷いて下さい。又桶やかめの中へ入れて熱湯をたつぷり注いで置き、上の方の澄んだところを取つて、油ににじんだ汚れ物を洗ふと綺麗になります。



筆：隨

寺に隣りて住む

新居格

實を云ふとわたしは無信仰の徒である。もしそれまでを信仰だと云へるならわたしは科學的虛無主義である。それにはわたしのだけの理由があるのだが、わたしはそれをこゝで説明しやうとは思はない。郷里にある家は四國の所爲か、眞言であるがわたしはその教理を少しも知らない。わたし自身は曾てはクリスチャンだつたが背教して年既に久しい。

だが、わたしは教會堂分けてもカトリックのそれや、寺の庭は好きである。靜寂を愛する氣持が強いのである。わたしは今西照寺といふ寺に隣りして住んでゐる。

朝には木魚と讀經の聲が枕頭に聞えて来る。鐘樓があるが鐘の音はあまりきかない。寺の庭といふものは、實に掃除が行き届いたものだと思ふ。寺の人は毎日落葉を掃いてゐる。わたしも庭の掃除がすきなので、日に二回は掃除をする。落葉を掃きあつめては焚き、どんな小さな雑草でも目に觸れると抜く。庭を疊同様に綺麗にして置きたいからである。

寺の庭を掃く寺の人とわたしの掃除がぶつかるときがある。挨拶を交はしてお互に庭掃除をする。蓋し一種の心境である。わたしはどうかすると寺の庭の方ま

で侵入して掃除をすることがある。寺がわたしの家の大家さんだから、親しさは内輪のもののやうである。

わたしは執筆に疲れると、寺の庭を散歩したり、墓場を歩いたりする。境内は非常に廣い。

わたしが今の家に越して來てから一層落付いて仕事が出来るやうになつた。わたしは夜の静かさをよろこんで讀書に耽けることにしてゐる。晝間は火桶に香を焚いて端座しながら原則として執筆することにしてゐる。

「香の匂がするね。隣りが寺だからだら

う」

と、訪ねて来る香氣な友人はいふが、實はわたしが焚いてゐるのだ。彼等はわたしにそんな嗜好がないと信じ切つてゐるので、香の匂を隣りの寺のものにするのだが、薫香にたいするわたしの好みはかなり古いので、今に始まつたことではないのだ。

わたしは植物は好きであり、閑庭を愛する。簡素と僧侶的生活は望ましい。といふのは、文學者のほんたりの仕事もさうでなければ仕遂げ難いからである。でわたしはわたしの生活を僧侶的にするべく努めてゐる。

わたしは佛教に歸依する氣はない。他の一切の宗教を信じないのと同様に。わたしはだから佛教を知らない。知らうともつとめない。云はゞ縁なき衆生である。

わたしは虛無主義者ではあるが、無常

觀は持たない。東洋風の哀愁を含んだ無常觀はむしろきらひである。陰氣なことは絶対に堪らない。わたしは人々のやうに秋に物の哀れを感じることはない。物の哀れどころか秋の透明さを却つてよろこぶ。落葉に衰褪の事理を觀じないで、葉の落ちた跡に動く春の芽を見やうとする。冬の寂寛がわたしには堪らなくわたしを明徹にしてくれる。

迷ふとか悟るとかといふやうなことを云ふとそれ自體がわたしには氣障に聞へる。

何が迷ひで何が悟りなんだか、そんな觀念の遊戲はきらひである。思ふに高僧ならそんなくだらない問題を考へないのだらうと思つてゐる。

わたしは教へるといふ態度が一番氣に喰はないのである。従つて説教と云ふこともきらひである。その用語は蓋し面白くないものではない。

佛教の眞諦は或は無信仰を標榜するわたしの考方と却つて一致するのではないかと思つてさへゐる。

墓場もいゝものである。不潔で草茫々の墓地は困るが、掃除の行き届いた墓地はわたしにとつてはこの上もない散歩地である。

わたしは墓地にたいして寄せる因襲的な觀念がきらひであつて、そこはあまりにも何でもないとところだと思つてゐる。

墓地には綺麗な花をつける草花をめぐらし植へるがよい。靈魂だの幽霊だのといふ言葉は無用だと信じてゐる。落葉の朽ちるやうに、生活機能の停止するまでの話で、宗教とはそんなものに歸屬するものではなく、より多く生きてゐる人間の生活に對して役立つて行くところに意味がある。よくは知らぬが、高僧とはそこに教義を立てゝゐるのではないかとわたしは思つてゐる。

死は悲しいものではない。われ／＼が勉強して疲れると一眠りしたいやうに、生きることに生きぬく努力をして疲れると休息していく。死とはそんなものなので怠けものには死は憂鬱だらうが、努力精進したものにはこれでよしと快く頁を閉ぢて悔のないものではなからうか。すると、信仰のあるなしよりも、生活に張り切つてやるかやらないかと、問題となるのではないだらうか。

わたしは寺の隣りに住んでも佛教のことは幸か不幸か考へない。毎日落葉を掃き集めてはゐるが、それは道を清くするのと、運動のためだし、寺の庭を散歩しても閑靜でいゝといふに過ぎぬ。だから寺の隣りにゐても寺の思想には染まらな。困つた奴だ、濟度しがたいものだといふ。坊さんは云ふかも知れないが、そんなことを假染にも考へる坊さんがゐるなら全くどうかしてゐる。坊さんの社會にも制

度があつて管長を選挙したりしてゐる。投票だの、當選だのといふ言葉は宗教界には輸入すべき言葉ではない。

わたしは、だが寺と寺の庭とがすきだ坊さんのやうな簡素な生活がすきだ。寺の隣りに住むから落付いてゐると云つてもそれは寺の影響ではない。そして時には思ひもする。

近頃の坊さんはモダン化されて、その考へ方がわたしなぞより世俗的であるかも知れない、とわたしは案外の自信をもつてゐる。

佛教雜誌にこんな失禮な

隨筆をかいていゝかどうかを知らないが、心にもないことをかくのは嫌だから、卒直に感想を吐露したまでである。そしてそれがわたしの良心であり、道徳とするところなのだ。

× × × × × × ×

味の悦境



有機性天然ヨード

ヨードの素は

天然に多量のヨードを含み有害なノリ分がなく湯水に良く溶けます

用ひ度い方
肥り過ぎ、高血壓、お産前後の奥様方、顔色の良くない方、風を引き易いお方

進サンプル呈
大日本水産工業株式會社

卓效藥
ブレインは

血液を清淨にし骨格と神經を強化する強力ヨード有機性劑
効能
動脈硬化、中風、腺病、授乳婦の機カルシウム不足



信仰しんかうの深さふかの内容ないやう

— 小 消 息 講 義 (其三) —

中 村 辨 康

信仰しんかうに因よる願望がんぼうの貫徹くわんてつ

今彌陀いまみだの本願ほんがんに乗のりじて往生わうじやうしてんには、願ねがとして成じやうぜずといふ事ことあるべからず。本願ほんがんに乗のりずる事ことは、たゞ信心しんじんのふかきによるべし。(和語燈錄) 【法語抄四八】

天地てんちの大道だうだうを行いく

誰だれにもある向かう上心じやうしん

簡單かんたんに要えうを採とつて云いへば、凡すべてのものを「よりよくせん」とする一大意欲だいいよくが、元もとと／＼天地てんちに充みち満みちて居ゐるから、凡すべての生物せいぶつは、皆みなな本能的ほんのうてきな「向かう上心じやうしん」を持もつて居ゐるのではありますまいか。

若もしさうでないなら、例外れいぎなしに「向かう上心じやうしん」を持もつて居ゐる譯わけはないでせう。

進化論しんくわろんなどで云いふ「生存競争せいぞんきやうそう」と云いふ一理り由りゆうだけでは「相互扶助さうごふじよ」など云いふ氣持きもちのあることが合點がてんされ

ません。

元來「生存競争」なんて云ふことは嫌なものです。それは集團生活の上になる止むを得ない意欲で、皆な本當は持ちたくない氣持なのですから、出来るならそんな血眼になる息づましい事はやりたくありません。だからそれは集團を解散してテンデンバラバラに一人ぼつちで生活したら、そんな血で血を洗ふやうな「生存競争」をしなくてもすむ譯ですから、何も好んで集團を作らなくてもよい筈です。

然るに凡ての生物は皆な同じやうに集團を作つて居ります。夫れは集團して相互扶助して行かねば生活が安定して行けないからです。

して見ますれば相互扶助的な集團生活を望む氣持の方がむしろ基礎的なもので、そこから派生した葛藤を「生存競争」と名づけたに過ぎないのかと思はれます。即ち個人主義的な見方から、さう見たまでのもので、さう見た處にますます個人主義的な弊害を助長しても居るのではないでせうか。

全體の中の一部としてある私が、全體を無視して私丈よくなれる筈はありません。全體がよくなつて個人もよくなり、個人個人がよくなつて全體もよくなる、此の相互關係は、天地を貫く鐵則であつて、決して歪める事は出来ませんのですから、天然自然に具つて居る「向上心」も個人主義的なものなら本當の「向上心」ではなく、全體の偕和を破壊する邪心であります。

此故に佛教で云ふ自利と利他とが一致する「向上心」とそが本當の「向上心」であるべきだと思ひます。此の本當の「向上心」の中には、弱肉強食的な生存競争と云ふ意味は、毛筋程も入つてはならない筈です。

ですから、此の自分と周圍とが諄化され淨化されて行く「向上心」は、天地の心と同一なもので、大小の相違こそあれ、全く均しい傾向のものたる事は、疑ふ餘地がありません。

自利と利他と
の一致

個人主義から
全體主義へ

質の問題

如來の「本願」は此の天地を貫く絶大な宇宙的意欲を表現したものであり、それを宗教と云ふ綱にこし
て出したものでありますから、私達が一切の人々と一緒に「よりよく」なつて行きたい念願から、此「本
願」に随順して行きますならば、正しく天地の大道を調歩して居る譯で、孔子の謂ゆる「千萬人と雖も我
れ行かん」と云ふ正々堂々たる歩武も進められる譯です。

かくの如く天地の軌道に乗つた以上、私達の些やかではあるが「願共諸衆生往生安樂國」と云ふ皆んな
と一緒に淨く安らかな國に生きんとする願望はそれが正しいものであり、正しいものは亡びないのが天則
である限り、決して成就しない筈はないと存じます。

つまり、天地の大道と如來の本願とは道德的か宗教的かの表現の異りであり、如來の本願と私達の願望
とは宗教的には大小の相異に過ぎないのですから、何れも一直線上のもので、並行線や對角線ではありま
せんから、必ず歸一すべきものであります。隨て成就しない筈はありません。必ず成就し得る確實なも
のであります。

成る程、私達は個人主義に馴らされて居りますから、初めは單に自分丈を眺めて、自分丈の向上を望ん
で居るかも知れませんが、段々自分を反省して見ますと、單に「量」の上だけで増加されて行つても「質」
がよくなる限り、よくなつたと云はれないことに氣が付きまします。いくら物識りになつたつて、いくら
位が高くなつて、いくらお金が殖たつて、それは單に量が増したただけなのですから、其時は幾分氣持が
よくなり幾分明るく朗かになつたとしても、直ぐあとから物足りなさが感じられて來て、本當の幸福は擱
み得られないでせう。

「よくなる」と云ふことは、量の問題ではありませぬ。質の問題です。道樂者が律儀者に變化した。なま
けものが稼ぎ人に變化した。不孝者が親孝行に變化した。そこに人間の質が變つてよくなつたのでせう。

凡人への宗教

質が變らなければいくら「量」ばかり澤山持つて居たとて何にもなりはしません。例へば正宗の名刀を澤山持つて居たとて、劍道に堪能の人でなければ、畢竟骨董品の價值しかないやうなものです。

よく反省して見ますと、質の問題に氣がきますから、之はいかと思つて「南無」と云ふ悔ひ改めも出来、自然に質がよりよく變つて行きます。恰度鐵がきたへられて段々剛鐵になつて行くやうに、反省する度に一分一分が更生されて行きます。

かくの如く自利主義も段々鍛練されて眞實になつて行きますと、利他的な氣持が段々濃厚になつて來ます。自分一人だけでは事實上よくなれません。やつぱり周囲と一緒によくなつて行くのが本當だと氣がきます。ですから初めは自利主義だつても、それが眞劍である限り、此意味に於て一向差支へはあるまいと思ひます。何時とはなしに立派な利他行の出来る人になり得るからです。

かくして一分でも利他的な氣分が經驗されれば、其處にカラツと晴れた天地の公道が目の前に展開されて來ます。さうなつたらもうメめたもので、これからはグングンと向上の一路を辿るばかりです。

つまり初めて軌道にのれたのです。

だが、待つて下さい。

私達は凡夫であつて聖人ではないのですから、軌道に乗つたからと云つても、云はゞまだ赤切符の三等室なのです。一から十まで自分の思ふ通りの利他行が出来ると云ふ譯ではありません。

やつぱり從來やり來たつた悪い習癖が直り切れずに、煩惱生活の中に巻き込まれ勝になつて居るのです。だからこそ、念佛が捨てられないのです。すつかり生活が菩薩のやうに、利他的になつて居るなら、もう云ひ分はないのですから、さうなつたら、信仰も念佛も要らないのですが、實際問題としては仲々さうは行きませんので、何處までも天地の大道の根元たる如來の御恵みを仰ぐより外に「手」はありません。

手前勝手な信
仰は信仰と云
はれない

過去を許す

世には信仰を得ると直ぐ聖者にでもなるかのやうに誤解する人もあるやうですが、理想としてはさうありたいのですけれども、實際生活の上ではやつぱり周囲に引きづられ勝て仲々簡単には行きません。そこで徐々に周囲をも清め、そして自分をも清めようと、ひたすら如來の悲願にすがつて行くのです。こゝがまた信仰の深められて行く鍵でもあります。

信心の深さ

如來の悲願に隨順し、天地の大道に乗ることが出来さへすれば、私達の「淨き國に生きん」とする願望も成就する筈であります。が、信仰が單に功利的な手前勝手な氣持で、終始して居る限りに於ては、天地の軌道に乗つても居らず、如來の悲願に應同して居ると云ふ譯でもありませんから、若し自分が間違つて居たら人間に取つて一番大切な生命の問題を解決する筈がありません。

だからこそ法然上人も「信心の深きに依るべし」と云はれたのだらうと想ひます。

「天地の大道」と云ふことは無論道德的な言葉であり「如來の悲願」と云ふことは宗教的な言葉で、道德的と宗教的の相違がありますから、一方は秋霜の如く峻烈であり、一方は春の陽光の如く溫和であり、一見全然性質が違ふやうに見えますが、前にも申しましたやうに一直線上のもので、一枚の紙の裏表とも云へると思ひます。随つて宗教的には道德など無視してもかまはぬと云ふ理窟は成立たないと思ひます。「如何なる罪をも許す」と云ふ宗教的な寛容は、既に犯してしまつた罪に對しての寛容であつて、許されたのだからドシドシ悪い事を勝手氣儘にしても差支へないなどと云ふ横着な氣持までをも許す譯ではありませんまい。

改心しても尙ほ餘炎が残つて居て、ツイ、フラフラと犯すのであるならば、すまなかつたと云ふ本心か

信仰の深さと
は量の問題で
はない

隨蓮の深い信
仰

らの懺悔に依て清められませうが、初めから許るされることをチャンと書き入れて置いて故意に犯す罪は性が悪いです。それでは何んぼ何でも如來の悲願に添ふものとは云へません。それは手前勝手な信心、利欲満々たる信仰であつて、無論信心深いなどとは云はれないものです。

と云つて、また「信心深くなる事は容易でない」と思ひ過しをするのもまたいけないことで、何も極端にむつかしく考へなくともよいと思ひます。

「念佛はやうなきをやうとす」と云はれてありますやうに、普通では救はれる筈がないのを、如來の悲願に依て救はれるのだと信じて南無阿彌陀佛するところに、信が確立して居るのですから、素直に念佛の出来る人は悉く皆な信心深い人なのです。

隨蓮沙彌と云ふ人は、法然上人が讃岐へ流罪になつた時も御伴をした人で、極めて素直な信仰を持つて居た人でしたが、法然上人が亡くなられた後、色々な人が、念佛の心得方をこてこてと話して居るので、

「私はお師匠様からそんなやかましいことは承りませんでした。唯だ「申せば救はれる」と信じて念佛して居るだけでよいと思つて居ます」と云ふと、

「それは何にも知らない人にはさう云つてすゝめられたのではあるが、實はお經にも善導様の御著書にも……」

と色々委しく云つて聞かして呉れたので、さては深い義理もあつて、それをよくわきまへて居なければ、本當の信仰とは云へないのかも知れぬと云ふやうな氣持が起り、少し心が不安になつて來たのでしたが、其晩に一つの夢を見たのでした。

法勝寺と云ふ御寺の西の門から入つて行くと、池があつて色々な蓮の華が咲いて居ましたが、西の廊下の方へ歩み寄つて見ると、大勢の人が居て法然上人から信仰の話を聞いて居る様子です。

疑ひのないの
が信仰

すると法然上人は隨蓮を見付けて「こちらへおいで」と招くので、隨蓮が御傍へ行くと、

「此頃そなたが心に歎いて居ることは、ちつとも心配せんでもよいことです。例へばあの蓮の花を蓮ではない梅だ櫻だと云ふ人があつたとして、現在蓮の花であるものを、人に言はれたからとて、梅だとか櫻だとか思ひ迷ふことがある筈がないやうに、俺が前に「念佛すれば必ず救はれる。決定して疑ふな」と教へて上げたのを、そなたが其のまゝ信じて居るのは、蓮の花を蓮の花だと思つて居るのと同じことで、今さら梅だ櫻だと云ふ言葉に迷はされなくてもよいではないか。蓮を蓮と信じて居るやうに「申せば助かる」と深く信じて念佛申して居れば、それで必ず助かるのだから、ユメユメ迷つてはなりません」と教へられたかと思ふと夢がさめたのでしたが、それ以來、隨蓮はチツとも心が迷はなくなつたと云ふ事です。之などは全く「深く信ずる」と云ふことの最も典型的な純粹な行き方でありまう。然し之は決して念佛の意義を云云することを否定して居るものではありません。唯だ念佛の意義を云云することに依て大切な信仰がぐらつくことがあつては何にもならぬことを諷められたのでせう。

要はグラツカナイ確信を持たねばならぬことが大事なので、信仰を固くする爲に有効ならば、理論も多まます／＼可なりと云つてよいと思ひます。

今は、法然上人が「信心の深きに依る」と云はれた「深い信」の内容は、此の小消息の一番最初に、「行すくなしとても疑ふべからず」「罪人なりとても疑ふべからず」「時くだれりとても疑ふべからず」「我身わろしとても疑ふべからず」

と云はれた代表的な四つの疑ひがなくなつてすつかり信じ切つて居る態度を指して居るもので、極めて平凡な内容なのですから、信仰の深さと云ふ「深さ」其ものに思ひすこしをしては、却て法然上人の眞意を見失ふことになりはしないかと存じます。(つゞく)

鑽仰運動ニユース

春ともなれば

支部も亦潑刺

鑽仰會は絶えず颯爽と動いてゐる。一時たりとも止まる處を知らない。だが春ともなればまた一段と潑刺さるゝを加へる。全國に澎湃とどよめく鑽仰の大浪を見よ。次々に立上る支部の勇姿を見よ。春の陽の如く各地の活躍は新鮮に潑刺に全國に展開されて行く。

法燈は點ぜられたり

臺北支部颯爽と

發會式を舉行す



臺灣にあつて長く淨土教の宣布に努力して來た臺北市の淨土宗別院では本會創立早々から「淨土」こそ唯一の教化機關であると本會の擴大を計り、院長田村智學氏を支部長に、大家惠雲氏を主事として支部を結成し目覺しい活躍を續けてゐたが、愈々機熟し二月二十四日午後四時より別院に於て左記の様な順序で盛大な發會式を舉行した。

開會、おつとめ（當支部作成の勳行式による）、挨拶（大家主事）、會務報告（上野幹事）、祝電、祝詞（猿渡幹事）
更に一同夕食を共にして會員の臺北一中教諭村山勇氏の「法然上人とその時代」の有益なる紀念講演を聞き支部員の使命と覺悟とを新らたに認識せしめられた。かくて會員清水俊明氏の閉會の辭と共に感激裡に

式を閉じたが、會員五十名、参加して頗る盛大であつた。尙當支部では嚴重な支部會則を定め、鑽仰會のすゝめを完成し一段の飛躍を試みてゐると共に、獨自の莊嚴な勳行式を作つて支部員の信行具足に大童である、今後の活躍が切に期待せられる。

慶元寺支部例會

質疑應答に賑ふ

東京市世田谷區喜多見町の慶元寺支部（主任山田信鏡氏）では二月十五日午後六時より同町の成城會館で最初の例會を開いた。本部から中村辨康、辻重光の兩氏出席したが、特に中村氏は懇切なる講話を行つて多大の感銘を與えた、約三十名の會員が集つて緊張裡に終始したが、その大半が知識階級の青年で、講話後中村氏を中心として眞面目な質疑が續出し、中村氏また一々丁寧に答へられて疑を率直に解明され近來にない眞剣な會であつた。今後毎月一回必ず開催しようとの熱望が會員から出て近日第二回の會合が持たれる。

會員の聲

▼鑽仰會の發展を心から祝します。「淨土」を毎月拜見致してゐますが、誠に深く感ずる處多く、特に二月號の眞野先生の「鑽」に付ては他流の書に於ても深く感謝するところにござぬ。私は眞宗の者ですが常に教材は「淨土」から取つてゐる次第にて、淨土他力の宣布の爲に益々活躍あらん事を祈念して止みません。青年會にも淨土講話及び愛護講話をなし、今日では十五六名の同志を得ましたが、未だ支部成立には遠せず確念に思つてゐます。御發展を祈るまゝに一筆（朝鮮・元山別院・大谷派・沙門法劍）

▼毎月「淨土」を週しと待ちながら拜讀致して居ります。大人も結構ですが、何と云つても小供の時代から宗教は教へねばならないと存じます。小供からせがんで本を讀みますと家中が明るくそして楽しく長つゝきが致します。故に童話を二つか三つづゝ入れて下さい。小供から親は教へられる事が大變に多く小供が毎月益しく本を待ちますと一人が二人二人が三人と讀むやうになり、知らぬ間に修養が出来るかと存じます。（大阪市・念佛寺青年會・中島善三郎）

▼結成三年を迎へるに當り、各地方に於て鑽仰大會を開いて讀者の聲及び信仰實話を語り合つては如何がですか。（大阪・念佛生）

▼貴會の隆盛は實に稱名の響の高まるが如く感ぜられます。當支部は僅か二十二名の集りでありませんが、誠に熱心な集ひで例月の會には念佛の聲に満ちてゐます。一月二十五日には衆賢會を催し全會員出席の下に新春の和やかさを味ひ會の隆盛を祝願致

千葉木更津町に

支部發會せらる

一舉に五十名を獲得

本會木更津支部(千葉縣木更津町選擇寺所在)では主任山本瑞瑞氏が専心奔走して支部發會式の準備中であつたが、昨秋數萬の巨費を投じて大本堂も再建したので、去る二月廿五日法然上人御忌日に、午後七時から眞摯な發會式を舉行した。山本主任は昨年來、時折信仰の集ひを催して信仰の策勵に努めてゐるので、會員は約五十名であつたが何れも求道心の熾烈な人達であつた。殊に會員が何れも一家の中堅をなす壯年者であつたのは誠に喜ばしかつた。本部からは佐藤賢順氏出講して「法然上人の宗教と現代」を講じた。將來益々發展する多幸なる支部である。一舉に五十名の支部員を得た事は山本主任の並々ならぬ努力の賜であるが、その主任の熱意に酬いんとするの全支部員の意氣も亦高らかである、とも

かく法益薄しと傳へられる千葉にかゝる強力な支部が生誕した事は本會のみでなく全教界にとつても大きな喜である。

直行寺支部の

衆餐會

北海道小樽市の直行寺支部では毎月眞面目な例會を行つて鐵仰の實を上げつゝあるが、去る二十五日には衆餐會を催した。會

員一同和やかな中に食事を共にし、會の盛大と支部の發展を祈ると共に、各自の信根培養を祝福して散會した。二十餘名の支部であるが、ひたむきな例會には尊いものがある。

「浄土」を教材に

山形縣最上郡戸澤村の小學校々々長熊澤善助氏は「浄土」こそ最良の教材であると、教員一同に大宣傳されて鐵仰の氣勢を上げられてゐる。

中野支部 中野區小湊町の中野支部では三月五日午後一時より支部例會を開催し、本部より藤井實應氏出講した。當支部は毎月一回も缺かさず例會を開催する眞面目さである。

支部設置發表 (第十八回)

490 法然寺支部 朝鮮咸北羅南邑生駒町 久松元昭氏外十七名
489 木齋寺支部 深川區清澄町三ノ一 福田有誠氏外三十名
488 光嚴院支部 芝區白金丹波町 金子全應氏外二十名
487 重國寺支部 深川區江裏四五 大谷玄旭氏外二十名
486 正覺寺支部 淺草區黒船町六 日比野謙我氏外三十名
485 兼二浦支部 朝鮮兼二浦淨土宗教會所 戸田見誠氏外六名

495 向陽支部 堺市向陽町二二六 松村清三郎氏外七名
494 給然寺支部 長野縣東筑摩郡中川手村 大澤慶我氏外六名
493 淨運寺支部 群馬縣桐生市 野口周篤氏外二十五名
492 長安寺支部 廣島市馬場町 松村直道氏外十名
491 蓮澤寺支部 千葉縣木更津町木更津 山本瑞瑞氏外四十七名
(以上十一支部)

しました。近況を述べ御指導の御禮に代えます。(小樽市・直行寺支部)
▼今回始めて本誌を拜讀致しましたが、誠に爲になる本で、これこそ私の探し求めてゐたものと、大變に喜んでゐます。今後とも益々立派な雑誌とし下さらん事を切望します。(兵庫縣・中田恒雄)

▼偶感

ト居聲井樓回春 多偉健全持此身
琴屋靜閑無賀客 瓶梅對座酌新醇
藤井藤然僧正の光榮を聞きて三月十日の御還忌唱導師に對して
三つの祖の高き法會におほけなく
高き唱導のいみじき音つれ
(六十九翁葉翁)

▼昨年十二月見なれぬ「浄土」が配達され思はず開いて拜讀しました。尊き教訓が一々私の胸を打ち、誰が送つてくれたのかと思ふに思つてゐますと、二三日して東京の芝區の寺院から一度讀んでみよとの手紙が來ました。私は事業上毎日多忙にして讀む時間がありませんで今まで爲になる本も一日通して終る位でしたが、「浄土」を拜しましてはとても楽しく、夜床についてから他の本より先づ一番に讀むのが楽しくなりました。かくの如き本をもつと早くから知らせて頂きたいものだと思つて、これから毎月讀むのを楽しみに致してゐます。(兵庫・宮田善治)

支部、會員倍加の願

過日、本會組織部より、各教區組長宛に支部勸誘狀を發送致しましたが、各寺院並びに會員の方々はこの機を逸せざ、本會擴大の爲に心を致される様御願致します。

編輯後記

◇別項記載の通り、京都知恩院の三上人遠忌は未曾有の盛大さを以て終始し、宗門の前途益々多幸なるを思はせるものがあつた。三上人特輯號を發行して、この盛儀に微力ながらも力を盡した本會は、共に聖代の無窮の皇恩と益々燦然たる法燈の輝きに感激おく能はざるものがある。今後更に活動を強化し日本淨土化の一翼たらんと決意を新たにせざるを得ない。

◇本號は前號のやゝ固かつたのに比して、讀物をふやし、易しい興味あるものを多くした。色紙を入れたのも一つの試みである。

◇「家庭の淨土」はもつと多くの方々に依頼して、項目も各方面に渡るやうに計畫したのですが、執筆者の都合によつて、計畫を變

◇佛典說話全集 全十三冊揃 窪川 拾五圓 賣價

◇國譯一切經 全百五十五冊揃 窪川 百拾圓 賣價

古本宗教書籍目錄
近古書時報

御入用の方は各冊とも送料二錢づゝ御送附を乞ふ。

電話小石川三七七〇番
振替 東京五七七三番

東京市小石川區白山前町
窪川書店

更せざるを得なかつた事は、編輯者も讀者諸賢と共に本意ない次第でした。

◇今月からは例月通り、聖典講義も、歌壇、俳壇も續けて参りますから、愛讀者の御批判、御投稿も従來に増して、盛大にお送り下さるやうお願い申します。

◇なほ、本會宛に毎日澤山の投書が御座いますが、全部掲載した

いのは山々ですが、紙面の都合もありますから、採用出来ない分も多く、それ等の方々の原稿が山積してゐます。数が多いので返送料の添付してない分は御返送申しませぬ故、今後返送御希望の方は二錢切手同封して下さい。

◇御投稿は大いに歡迎いたしますが、四百字原稿用紙十枚以内に御願申します。

淨土 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三年三月三日印刷納本
昭和三年四月一日發行
(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄
印刷所 大日本印刷株式會社
發行所 法然上人續仰會
東京市牛込區芝公園明照會館内
振替 東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢 (送料五厘)

一ケ年 金一圓 (送料不要)

右の一ケ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば「淨土」が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

法然上人鑽仰會へ御入會下さい

法然上人鑽仰會とは？

法然上人鑽仰會は現代日本の世相の上に元祖大師法然上人の高邁無比なる御人格を高く顯揚し、凡ての日本人が正しい宗教的覺醒の機會に恵まれんことを念願とするものであります。

◇從つて元祖大師の御教へに基いて淨土教の正しい教義を最も平易に、最も明かに發揚するための、種々なる教化的活動を行つております。

雑誌『淨土』をお読み下さい

◇本會では以上の目的の下に、月刊大衆雑誌『淨土』を發行しております。

◇『淨土』は新しい内容を新しい方針の下に編輯し、傳統に輝く正しい宗教を、現代に一番適した形式で發表しておりますから、誰れでもが、興味をもつて讀むことが出来ます。讀んでゐる中に何時か信仰を持たざるを得なくなるのが、雑誌『淨土』の特色であります。

◇新鮮で易しい信仰的讀物は勿論、一般の小説や興味ある讀物まで満載してありますからどなたにおすすゝめになつても好感をもつて迎へられております。

御入會の手續きは簡單です

◇本會事務所に御入會の旨を申添へて、一圓御納めになれば、その時から會員として、毎月一回『淨土』の配布を受け、その他種々な特典が與へられます。

◇既に全國に五百近い支部がございますから、御入會の方はその地方の支部へ直接御申込みになれば、支部員として、支部の種々な催しに参加出来ます。

◇その他詳しいことは往復はがきで御問合せ下さいれば御返事申上ります。

◇御入會御申込みは本誌添付の振替用紙を御利用願ひます。

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

信仰の糧に本會の書籍を

中村 辨康著 四六版一三〇頁
法然上人の信仰生活 三十四錢

中村 辨康著 四六版八〇頁
信仰讀本 二十二錢

藤井 實應著 菊半截一五〇頁
法然上人法語抄 三十四錢

佐藤 春夫著 特ノート版三〇〇頁
法然上人傳 掬水譚 四圓七十二錢

中村 辨康著 四六版一四〇頁
講一牧起請文 十錢

中里 介山著 三六版一三〇頁
法然上人傳 六十錢

「淨土特輯號」 菊版一三〇頁
念佛讀本 二〇錢

(定價は凡て送料共であります。)

好評嘖々たる高級布教用書！

中村 辨康 著

講話 一枚起請文

法然上人の「一枚起請文」が浄土宗教義の精

髓を盡したものであるのは今更多言を要しませ

ぬ。この簡潔流麗な御一文の中に籠る本當の信

仰精神を著者の豊富な體驗と該博な智識に基い

て、易しく詳はしく説いたもので、これによつ

て毎日皆様がお讀みになる「一枚起請文」の正

しい意味が、生活に則して、はつきりと解りま

す。目下非常な好評で、寺院、諸團體から布教

用、教化用として多數の注文に接しております。

多部數購入者への特典

團體、個人を問はず本書を一時に十部以上御購入御希望の向には一割引（九錢）とし、送料は當方にて負擔します。但し代金引換郵便はお斷り申します。切手代用は一割増しに願ひます。

發行所

法然上人鑽仰會

四六版・七〇頁
誰にも讀める總振假名付
二色刷美麗表紙
定價 十二錢（送料共）

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十二年三月廿日印刷納本 昭和十二年四月一日發行

浄土 第三卷 第四號 定價金十錢（送料五厘）